

学体連会報

発行日 平成 13 年 6 月 10 日
東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号
国立オリンピック記念青少年総合センター内
財団法人 日本学校体育研究連合会
電 話 (03) 3465-3954
FAX (03) 3465-7464
発行者 浅田 隆 男

いま、求められているもの

— 企画力と実行力 (読書のすすめ) —

会 長 浅 田 隆 夫



1 機関誌「学校体育」(月刊)の役割

本連合会の目的は、寄付行為にみられる如く、篤志家から基本金となる種や寄付金を仰いで、それらの種を实らせその花実を傘下団体の研究活動や指導者の資質向上など、学校体育の発展のために寄与させて頂くことを本旨としています。この度、53年の歴史をもつ月刊指導誌「学校体育」を本連合会の機関誌として刊行する運びになりました。

一般に、指導・情報誌としての本機関誌には、日進月歩の学校体育の営みを、子どもの自己教育力の理解を深める記事と学習内容(教材・特性・技術・戦術・ルール・モラルなど)の専門的な知識の他、これらの基礎となる生理学・バイオ・医学・心理学・社会学……などの科学的知見とこれを学習の場で自らの指導に役立たせる具体的な指導方法を提示することさらには外国の優れた指導者の考え方や実践の成果を比較考究する記事などが望まれます。

特に、いま、各学校の「教師に求められているもの」は、新指導要領の趣旨を踏まえ、「よい授業」に向けて授業研究を積み重ね、よりよい年(月・週)計画・日案を学校独自で作成することでしょう。本誌の6人の編集委員は、これに応えるべく多忙な時間を割いてこれに当ててくれています。筆者は去る2月も本誌6月号の編集会議に出席させて頂きましたが、6人の委員から特集を巡って開陳されるコンセプトや内容の殆どが、スペースの関係で削除せざるを得ない状況にあることを知って、実に残念に思ったことでした。そして、編集会議終了後は、また連れ立って街角の酒屋の暖簾を巡るといったエネルギーとその背後に伺われる編集・広報へのラポートづくりには頭の下がる思いがしました。

2 企画力と実行力を育てるもの

このように時間と労力、そしてかなりの経費を投入して公にされる月刊誌も読者を得て購読されなければ全く意味をなしません。よりよいカリキュラムづくりや授業研究に求められているものは教師の企画力と実行力であり、企画力は創造力と思考力に支えられたもので、いわばイメージ構想力といってよいものでしょう。

千差万別の能力や関心をもつ子ども達をいかにす

れば「生きる力」(心)に昇化させていくことができるかは、教師のよい授業に向けて絶えず努力する日常の実践的積み重ねと新しい科学・教育の知見を吸収・省察していくことが大切で、またこれによって、さらなるイメージや内容が蘇り、ある場合にはこれが連鎖反応して別の内容へと飛躍・発展させもします。いわば、イメージの構成能力の拡大化が計られるのであって、これが創造性を培うということであり、読書が自己教育運動といわれる所以です。

読書は、未知のものへの自発心さえあれば、いつでもどこでも心が満たされるものであり、自らの考えを見直す契機ともなり、実践の奥に潜む本質を見抜く機会をも提示してくれます。しかし他面、読書には「考える」という心の緊張感がないと文脈の真の意味を理会することができず、自分の生きた言葉や表現・行動にはならないものです。

今日のように、暇さえあればテレビづけになり、受動的・情動的文化の中毒に陥るようになると、イメージによる関係性の思考過程を必要とする創造的能力は生まれにくくなるので、この時間をできるだけ読書に当てるように習慣化することです。

この意味で4月号から特集の他、地域の編集・広報委員(28頁参照)には、現場のユニークな実践者の論考を掲載させて頂くべく、また投稿をもし易くするために10余本の連載が加えられています。

これによって各地域の今日的学校体育課題やその解決策、中央と地方、地区相互間の研究活動や指導者の資質向上はもちろん、今回の新指導要領の求める90時間枠の有効な活用法や総合的学習の取り組み、学校・家庭・地域の連繋の問題やこれからの教科体育の目的・内容・評価の問題など、今後の現場研究の新しい企画力や実行力に大いに裨益するものと確信しています。

これらの要請に応え、かつ本連合会の目的に照しても1人でも多くの先生方に本誌の購読をお薦めし、上述のような問題解決の糧にして頂きたく思います。お求め易くするために4月号より購読料は1年間・12冊・5000円(13年4月号より送料サービス)としました。本学会員のメンバーシップとして考慮願えたらと思います。

これからの学校体育

副理事長 友 添 秀 則



1. 世界の学校体育の現状

昨年11月、大阪国際会議場で体育やスポーツ教育に関する国際会議が開かれた。この会議のシンポジウムでは、日本、韓国、イギリス、ドイツ、アメリカを代表する研究者によって、「教科体育の存在意義を問う」という統一テーマで、各国の学校体育の現状が報告された。

付言すれば、シンポジウムで報告された国の多くは、ここ10年程前から学校教育の大きな改革を行っており、体育（保健体育—以下「体育」と表記する）もその影響下にある。そしてそれらの教育改革は、例えばイギリスやアメリカにみられるように、1980年代以降の不況下で、子どもや生徒の学力低下や非行という社会問題に対処することが課題であった。またグローバリゼーションが一層浸透するこれからの国際社会の中で、競争力を備えた人間を育成することが目的であった。そのため、全国的な統一カリキュラムで主要教科の学力向上が目指されることになった。このような状況の中で、体育は授業時間数が削減されたり、主要教科に比べて一段と軽視される状況にあるとの報告が大勢をしめた。

2. 問われる体育の教育責任

シンポジウムに参加した上記の国のほとんどは、わが国の学校体育同様、1970年代以降、スポーツを体育の主要教材とするいわゆる「スポーツ教育」を行ってきた国々である。例えばドイツでは、社会の中の多様なスポーツ実践（競技スポーツ）を学校体育に取り入れ、教科名もすでに1960年代前半（旧東ドイツ）から70年代にかけて（旧西ドイツ）、「体育」から「スポーツ科」ないしは「スポーツ教育」に改められている。アメリカも同様に、プレイの持つ教育的意味を重視するスポーツ教育の実践を行ってきた。また我が国でも周知のように、運動やスポーツそのものの楽しさを味わうことを主眼に、学校体育の授業が構成されてきた。

ところが、上記のシンポジウムに参加・報告したイギリス、アメリカ、ドイツ、韓国の近年の一連の学校体育改革の中では、細かな点では各国の状況は異なるにせよ、これまでの体育という教科の教育責任（体育のアカウンタビリティ）が、様々なレベ

ルから問われたと各国の学校体育を主導するシンポジスト達が多く述べた。

このことを換言すれば、体育という教科が現代という錯綜した時代に生活する、今の子ども達が抱える切実な教育課題にどのように応えることができるのかということである。と同時に、（競技）スポーツを授業で楽しむだけであれば、税金を使って行う公教育で実施する必然性が果たしてあるのかという問いに、これまでの体育という教科は答えることができるのかということでもある。

そして、シンポジウムに参加した各国では今、学校体育改革の中で体育という教科の教育責任が懸命に模索されているとのことであった。

3. これからの学校体育に求められるもの

さて、我が国では改訂学習指導要領実施に向けて、新たな実践の模索や試行が行われている真っ最中である。体育の授業時間が削減される中で、これから一層体育の教育責任が問われ、また「スポーツ振興基本計画の在り方」で提唱されたように、学校体育と地域スポーツの連携がより一層重視されるようになろう。

このような状況下で、これからの体育が、十分にその教育責任を果たしていくためには、まず体育の学習に必要な学びの次元が真摯に考えられねばならない。第一に、生涯に渡ってスポーツを楽しむ、仲間との交流を豊かにするためには、技能習熟に必要な学びやスポーツ場面に必要なソーシャルスキル（人間関係技術）の学びが必要であろう。第二に、21世紀という時代のスポーツ文化の創造のためには、スポーツについての知識の学習も不可欠であろう。第三に、スポーツに自立的、豊かなスポーツライフを送るためには、自分たちでスポーツ集団を組織できるためのグループダイナミクスに関わる学びも必要かもしれない。第四に、スポーツと良好な形で共生していくためには、スポーツ実施に必要とされる倫理的な学習も重要になってくる。もちろん、健康と運動処方に関わる学習の重要性はいうまでもない。

これからの学校体育はどのように創造されるべきか、大いなる議論と試行的実践を重ねていきたい。

統一と自由

常務理事 森 知 高



「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、運動に親しむ質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。」

「身体的に教育された人は、(1)いろいろな運動ができ、そのうちのいくつかに熟達している。(2)運動技能の習得にあたって、運動の知識を応用できる。(3)ライフスタイルに運動を取り入れる。(4)体力の保持増進ができる。(5)運動時に責任ある行動がとれる。(6)運動時のお互いの違いが分かり、尊重することができ。(7)運動には内在的価値（楽しさ、自己表現等）があることを知っている。」

前者は、皆様がよくご存じの2002年から完全実施される改訂小学校学習指導要領体育編の目標です。後者（筆者の意識であることをお許し下さい）は、1995年に全米スポーツ体育協会（NASPE）が定めた米国の体育の国家基準の内容です。

内容的には、双方で多少の出入りがありますが、大筋では似通っていると言っているのではないでしょう。

ところが両者には決定的な違いがあります。これは、共に「国家的な規模」のものとして存在しています。しかし、日本のそれは周知の通り文部科学省が定め、法的拘束力を持つものですが、米国のそれはNASPEという民間の1組織が作成したものであり、何らの拘束力を持ちません。

米国は地方分権を旨とする国ですから、日本の学習指導要領のように全国的に統一され拘束力を持ったものは存在しません。しかし、現在の米国には学力の低下を憂う声があります。この憂いを解消するためには、子ども達に「何をどの程度身に付けさせれば良いか」と言う目安が必要になります。これが学校カリキュラムの各教科で国家的な学習内容の基準を設定しようという国家教育改善運動になっていきます。この要請に体育界で答えたものの1つがNASPEのそれです。（したがって、NASPE以外にも体育の国家基準と銘打ったものが存在します。）NASPEは全米体育界に強大な影響力を持つアメリカ健康・体育・レクリエーション・ダンス連

合（AAHPERD）傘下の組織ですから、この全国基準にはかなりの重みがあります。しかし、現場の各学校はこの基準にしばられることはありません。各公立学校の指導の指針となるのは、各地方学区のそれです。

そうすると、いくら全国基準を定めようとはそれは絵に描いた餅におわるのでしょうか。私が見ることができたウイスコンシン州では、NASPEの全国基準を参考にしながら州の現状を加味して基準を作成し、それを学区に伝えようとしていました。当然、この州の基準が学区で採用されるか否かは不確定ですが、州はこの基準の必要性を説き、各学区の実情に合わせてカリキュラムを作成する際のガイドラインとして使用することを要請しています。

ここで注目すべきことは、州の基準の作成にあたっての手続きです。その草案作成は、当然州内の各方面の有識者達によってなされますが、その結果を公報誌、ホームページあるいは公開フォーラム等で州民に伝え、広く州民から意見を聴取し、これに基づきながら更なる検討を加えていきます。ウイスコンシン州ではこの手続きを2度にわたって実施しています。各学区でも、同様な作業が行われているでしょう。

ここに統一と自由の統合を見ることができそうです。制度上での全国的な拘束が不可能な中で基準という形で統一を図ろうとし、かつまた、地域との関係を計りながら、その実情に合わせて、それぞれの自由度で実際の授業を展開していこうとしています。

学習指導要領の総則には、「地域や学校の実態及び児童の心身の発達段階や特性を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとする」と述べられています。この前文には「法令及びこの章以下に示すところに従い」と記され、統一と自由が実現できる可能性をうかがうことはできますが、実際はいかがなものでしょうか。前文にあまりにも縛られていないでしょうか。

法的拘束制の問題がありますから、まずはあなたの学校からの地域への情報の発信（「体育では、子どもにこうなって欲しくて、こんなことをやっているよ」）から始めてはいかがでしょう。

平成12年度 第2回理事・評議員及び 代表者会議議事録

副理事長 三 原 忠 彦



議 事

日 時 平成12年10月25日（水）
午後14：00～16：00時

会 場 青森市 青森厚生年金会館

出席者 理事・評議員及び都道府県代表者78名
司会進行：椎木理事長

記 録：三原副理事長

平成12年度第2回理事・評議員会及び代表者会議は、金森副会長の開会挨拶の後、椎木理事長の司会の下に行われた。

会長挨拶（浅田会長）

雨の中を遠路わざわざお出でいただき、ありがとうございます。今回は、特にお願いしたい審議が3つございます。第1点は文部省からの連絡事項についてですが、後ほど椎木理事長から説明いたしますので、活発なご審議をお願いいたします。第2点は、53年続きました、月刊雑誌「学校体育」を来年の4月号から本会の機関誌として発刊することが春の理事・評議員会で承認されました。この機関誌をいかに育てていくかについて、先生方のご意見をお聞かせいただきたいと思います。特に文部省の連絡事項と関わりをもつ問題もありますので、よろしく願いいたします。第3点は、21世紀の教育を考えた場合に、幼少時の教育は体育としても極めて重要な問題だと考えております。そういう点で、10年前からぜひ、幼稚園部会を旗揚げをしたいと先生方に再三お願いをしてまいりました。できれば、旗揚げは14年度の北海道大会の時にしたいと思います。何分ともよろしく願いいたしまして、ご挨拶にかえさせていただきます。

議長選出

規約により浅田会長を議長に選出した。

I. 報告事項

【議長】報告事項を椎木常務理事をお願いします。

1. 第2回理事・評議員会及び代表者会議の議題（椎木常務理事）

第2回理事・評議員会及び代表者会議の議題につきましては、資料に基づいて進行させていただきます（訂正と文言の挿入についての説明）。

【議長】三原常務理事に平成12年度第1回理事・評議員会の報告をお願いします。

2. 平成12年度第1回理事・評議員会の報告（三原常務理事）

平成12年5月27日（土）、国立青少年総合センターで、委任状を含め出席者56名により開催されました。定数の2/3以上の出席で会議が成立したことが報告され、開会の言葉に次いで会長挨拶がありました。自己紹介、議事録署名人の指名に続き、規約により会長が議長に選出されました。議事に先立ち、本年度が役員改選の年であることから、7名による推薦委員会が構成され、浅田現会長を再任したいという委員長報告の通り決定いたしました。

1) 平成11年度事業報告

事業6項目が無事終了したことが報告されました。

2) 収支決算報告

歳入の部で当初予算計上したミズノスポーツからの補助金50万円がゼロになったこと、歳出の部では当年度から事業費と管理費に分けて予算編成をしたが、編成上の齟齬が若干あり、予算決算の数字が多少不自然なものになったことが報告されました。次に特別会計の収支決算の報告があり、財産目録、貸借対照表、会計監査報告が提示されました。監査報告の後、平成11年度収支決算報告が了承されました。

3) 平成12年度事業計画（案）

全国学校体育研究大会を青森市で開催すること。全国保健体育優良校・功労者の表彰を行うこと。講

習会、研修会を開催すること。機関誌の発行準備作業を進めていくことについて報告され、了承されました。

4) 平成12年度収支予算（案）

歳入の部では前年通り補助金をゼロとして計上したこと。歳出の部では、11年度の決算数値を勘案して予算額を出したこと。その関係で、指導者研修会費が増額になったこと。特別会計は、研究事業準備金を増額したこと。前年度決算に比べ予算額が多いのは、周年事業の関係などの準備のためとの説明があり、了承されました。

5) 平成12年度全国保健体育優良校・功労者表彰について

県の教育委員会主管課長宛に7月5日までに推薦をお願いしたいとして依頼済みであること、県単位で提出して欲しいこと、中央審査委員会は例年通り行うとの説明があり、了承されました。

6) 平成12年度研修会の内容について

幼稚園・保育園の部、小学校の部、中等高等学校の部と3本立てになっていること。新教育課程の基準、新学習指導要領の趣旨を踏まえた内容を計画したこと。内容的には特色をもったものと自負しており、多数の参加を希望すると説明があり、了承されました。

7) 平成16年度以降の全国大会開催県について

平成16年度は徳島県に決定しました。17年度については富山、長野で、また、19年度については広島、山口、島根でご協議をいただき開催県が決定されることを望む旨とりまとめられました。

8) 機関誌の問題について

学体連としての機関誌、月刊「学校体育」を平成13年4月号から刊行することについて、その趣旨、内容、方向等の説明、提案が行われました。これに対して質疑応答の後に、基本的考え方について了承されました。次に報告事項として、周年の記念誌については過去の経緯を勘案し、40周年という表現から50周年の記念誌としてタイトルを改めること、執筆についての協力依頼がなされました。

9) その他報告事項

会報37号についての発行予定が発表され、続いて第39、第40回の全国大会の準備状況が青森県、宮崎県、それぞれの関係者から報告されました。第38回大会が行われた茨城県から無事終了したことの報告がありました。

以上、ご報告いたします。

【議長】 何かご質問がありますか。なければご承

認頂けますか。（拍手）

次に平成12年度常務理事の業務分担について椎木常務理事をお願いします。

3. 平成12年度常務理事業務分担（椎木常務理事）

資料の平成12、13年度学体連本部の業務分掌表をご覧ください。今年が2年ごとの役員改選の時期に当たり、表のメンバーで業務を分担することになりました。事業の中に、研修会、月刊機関誌、50周年記念行事、幼稚園部会の設立準備等、4点の問題については特別委員会を組織して、それぞれの役員が表のように分担しております。以上です。

【議長】では、学体連会報、37号について椎木常務理事をお願いします。

4. 会報について（椎木常務理事）

平成12年6月30日付で学体連会報、第37号を発行いたしました。会の活動については会報の中に盛り込んでありますので、ご覧いただきたいと思います。以上です。

【議長】体育実技研修会について後藤常務理事をお願いします。

5. 体育実技研修会について（後藤常務理事）

幼稚園、小学校、中・高等学校別に実施致しました。内容は、幼稚園はリズム表現等4つの種目とパネルディスカッション。小学校は体ほぐしの運動を初め、器械、水泳等5種目について、また、中・高等学校については身体づくり運動、サッカー、ダンス、剣道等7種目の実施をいたしました。参加者は、幼稚園が35名と少なかったのですが、会場の関係からか、学生が多くなっています。将来の幼稚園教諭を目指す立場から、学生の参加は大事にしていくべきと考えております。小学校は2日間で延べ253名の参加者が、中・高等学校は延べ286名の参加がありました。開催通知の方法については、全国に向けては体育関係の情報誌、教育関係の新聞等を通じてお知らせし、会場校近隣の県、市町村には、直接所轄の教育委員会に学校数に応じた開催通知をお届けし、配布依頼をしているところです。来年、「学校体育」が本会の機関誌になれば、より広範な開催通知ができるものと考えております。全国からの参加者の拡大が実技研修会の課題となっております。以上です。

【議長】何かご質問ございますか。なければ次にまいります。

6. 月刊誌「学校体育」の学体連機関誌への移し替え及びアンケート結果について（友添常務理事）

月刊誌「学校体育」の機関誌への移し替えにつきましては、昨年度来より常務理事会を中心に発行元の日本体育社、関係機関と種々検討を重ねてまいりました。常務理事会で平成12年5月25日付の起案書を作成し、5月27日の全国総会理事会に機関誌化を諮り機関決定をいただきました。その後、平成13年4月からの機関誌化に向けて常務理事会の中に特別検討委員会を構成し、編集方針等の検討を重ねてまいりました。また、全国各支部の機関誌に対する意向をうかがうため、8月28日付で編集方針に関する調査を都道府県の会長、小・中・高等学校各部会長、学校体育主管課長及び担当指導主事の先生方のアンケート調査を実施しました。現在、アンケート調査の分析、検討を行いながら4月からの発行準備を進めております。その方向性についてはお手許の資料「機関誌編集の基本方針」にまとめてありますので、お目通しください。

次に、機関誌「学校体育」への要望調査の概要についてご報告します。資料の質問内容と結果をご覧ください。詳細は省略しますが、これらの結果と自由記述の回答も合わせて考えますと、体育の授業実践を中心に、文部省の学校体育施策を参照しながら、運動部活動の指導等にも役立つものを含んだ授業実践に有用な記事を中心とした機関誌が望ましいと、考えられるのではないかと把握しております。現在、この結果を踏まえながら、機関誌の内容を検討しておりますが、具体的に学体連の頁として支部だより、支部訪問、授業実践の頁という3つを考えております。最後に、ここ数年、会長をはじめ常務理事会を中心に積極的に取り組んでまいりました幼稚園部会設立に関する調査結果も載せております。ぜひご覧いただき、支部においても設立に向けて早急にご検討いただければと思います。以上です。

〔議長〕次に、都道府県研究活動の調査について三原常務理事お願いします。

7. 都道府県「学体連」研究活動の調査について（三原常務理事）

研究活動等に関する調査を実施いたしました。10月初めの段階で約75%の県からご回答をいただきました。ここでは、「研究大会の持ち方について」を中心にとりまとめた結果をご報告します。研究会、研究大会の有無についてはほとんどのところで開催しておられます。開催の時期は10月、11月が多く、参加人員は、研究会の規模によって異なりますが、100

名以上集まる会が多く、400名を超える研究大会も7県報告されております。行事内容は、講演会、公開授業、研究発表が多く、一部の地区ではシンポジウム、実技研修会等が見られます。費用については、分担金の受け止め方がまちまちであったということと、この項目については回答のないものが多かったため、金額的にバラツキが出ました。研究会、研究大会は全国各地で盛んに開かれており、それぞれ創意工夫を凝らして実施されていることが推察されます。月刊誌「学校体育」は、全国各地相互の情報交換の場となることを目指しており、この研究会、研究大会等の情報は格好の題材になるのではないかと考えられます。以上です。

〔議長〕次に50周年記念誌の執筆依頼について椎木常務理事お願いします。

8. 50周年記念誌の執筆依頼について（椎木常務理事）

50周年の記念誌の原稿執筆につきましては、現在、十数県で担当を決めていただいておりますが、まだ報告していただいていないところもございます。各都道府県の学校体育研究会のことについての執筆のご依頼で主題は、各都道府県の学校体育研究（連合会）の歩みということです。内容的には研究会設立の沿革、研究会の組織、研究会の事業、研究活動概要、研究大会、研修会、講習会等です。研究会の歴代会長、副会長、あるいは理事長等の名前。将来の課題等、その他特記事項等がありましたら記入していただきたい。ポリウムは、学体連の原稿用紙で、2～4頁の範囲内で、2月末日までに原稿を出していただければと思います。以上、よろしくお願

いします。

9. 優良校・功労者表彰について（椎木常務理事）

今年度の優良校については127校、功労者表彰については147名の推薦があり、中央審査会で全員の方の表彰が決定しましたのでご報告いたします。例年、約60%以上の方が表彰式にご出席いただくのですが、欠席される方もあります。その賞状はご出席いただいた代表の方がまとめてお持ち帰りいただくようよろしくお願いします。以上です。

〔議長〕以上、報告事項9項目含めてご質問ございますか。なければ審議事項にはいりまして、最初に文部省からの連絡事項についてお願いします。

II. 審 議 事 項

1. 文部省からの連絡事項について（椎木常務理事）

例年実施しております研究大会のことで、文部省としては研究大会ではなく、研究協議会をやりたいという申し出が電話でありました。理由は、予算編成上、研究協議会を主催したいというお話でした。私どもで主催しております研究大会の中身については並列でも構わないとか、いろいろあり詳しいことは不明ですが、文部省の主催の行事も大切にしたいわけではないので、このことについては今後詰めていきたいと思っております。私本人も説明を十分受けておりませんので、とりあえず文部省からの連絡があったことをご報告いたしまして、皆さんにご審議いただきたいと思います。

〔議長〕この内容について協議会というものの性格もよく分かりません。椎木理事長の方にある事務の係長から連絡がありました。7月の時点ですでに主管課長会議にその内容を出して、大体方向性はその時点で決まっているような情報が入っております。その点について先生方に情報がどの程度まで入っているのか、あるいは、研究協議会をするのであれば、こういう形式でどうでしょうかというふうなことをぜひ赤裸々にご意見を承りたいと思っております。よろしくお願いします。

岩見 質問のしようがないです。中身が分かりませんから。向こうから中身がきたのであれば、それについてわれわれも議論できますが、学体連でさえ分からぬのにわれわれには分かりません。

〔議長〕多分、体育課からきたのだと思います。これは岩見先生がおっしゃったように、わからんことと話し合うことはできない、その通りです。意見を承ることができないならば、常務理事会で文部省と関わったりいろいろな資料を集めながら、早急に結論を出さなければならぬということです。急いでいますから来年の春の全国理事会にかけることができません。今回は常務理事会の方にお任せ願うしかないと考えますが、いかがでしょうか。

竹本 平成14年大会は北海道ですが、すでに文部省が主催に入ることによって北海道教育委員会、開催地の札幌市の教育委員会が主催に入るという形で進めてきております。私どもは準備委員会を作り、来年から実行委員会に入っていかなければならないという形でこうやって参加していますが、名称が変わって中身が変わるというような形、あるいは、2日目の授業の後の分科会、あるいは助言者等の絡みがかなり入ってくるのではないかなと思うのです。連合

会の会長さんはじめ、そのへん、きちんとしていただいて、私どもに指示を与えていただかなければ、ちょっと動けない状況になってくるのではないかと思います。開催地の意向、準備大会等も考えられてお進め願いたいと思います。以上です。

〔議長〕今、竹本先生が非常に大事なことをおっしゃいました。その他にございますか。

岩見 文部省の本意がよく分からないものですから、これを今どうしよう、こうしようとしてもどうにもならないので、学体連本部の方で十分文部省から意向を聞いて、検討していただき、すでに準備している県にあまり影響のないような形で並列でもよいというのであれば、そんなに内容は変わらなくても多少研究協力的なものを多く取り入れるとか、そのぐらいで済むのではないかと思いますので、そのへんで検討していただければと思います。ここでいくら話しても結論はでないと思いますので、よろしくお願いします。

〔議長〕あり難うございました。非常に参考になりました。その他にございますか。では、そういうことも考え、常務理事の方で力いっぱい努力をしたいと思います。では、次にいきたいと思

2. 平成17年度以降の全国大会開催について（三原常務理事）

全国大会の開催につきましては、開催基準要綱を定め、ブロックの中で輪番制を原則として従来決定してきました。次年度は宮崎県で開催。以下順番に14年度北海道、15年度三重県と決定しており、16年度は徳島県にお引き受けいただけることになっておりました。また、17年度の第44回大会につきましても、富山県にお引き受けいただけるやに伺っております。18年度の京都府での開催の確認、19年度の広島、山口、島根県のご協議を待つ形になっております。この後、ブロック会議が開かれますので、その中で確認、あるいは見通しを立てていただくことになると思います。以上です。

〔議長〕あり難うございました。

富山県ですが、まだ私どもの県では話しておりませんので、ここに名前を挙げられますと、決まったかのような形になりますので、空欄をお願いします。

〔議長〕その通りです。では、学校体育の諸問題に入ります。

3. 学校体育の諸問題（友添理事）

新しい学習指導要領に移行することに際して幾つかの問題点が浮かび上がってきているように感じております。大きくは3つの問題。つまり、総合学習

の時間と体育はどういうふうに関わり合っているかということ。体づくり運動の中で特に体ほぐしの運動をどういうふうに扱ったらいいのかということの問題。そして、授業時間の大幅な、今まで慣れ親しんできた授業数でいえば非常に大幅な削減を前にしてどうカリキュラムを実際に組んでいったらいいのか。年間計画をどう立てたらいいのかという問題があるかと考えております。このように学校体育も新しい指導要領を前にして、新たな展開が行われだしているという状況かと考えています。21世紀に向けた子どもたちの豊かなスポーツライフの実現のために学校体育の真価が問われてくる時期のように思っています。そういう意味で、各支部相互の研究や実践の情報交換が非常に重要性を帯びてくると考えます。微力ではありますが、本部、あるいは機関誌「学校体育」が少しでもそれに貢献できれば考えます。

【議長】何か質問ございますか。次に次期開催県の準備状況を竹村先生、お願いします。

4. 次期開催県の準備状況（竹村先生）

平成13年度は、宮崎県で開催を準備しておりました時にいろいろな問題が出てきて、どうしたものかと考えているところです。詳しいことについては、文部省と学体連の事務局と十分練っていきながら準備を進めていかなければと思っております。宮崎県は、小・中・高のつながりある授業ということで、1つの体育館に先生方を全部集めて小学校、中学校、高校の授業を見ていただくという宮崎方式でこの十何年間きております。来年度の全国大会も宮崎方式を全国の皆さん方に見てもらうことを期待しておりました。もしこれが協議会ということになった時には、いろいろ変わってくるのではないかと思います。皆さんのお手許にあるように、すでにパンフレットは全国学校体育研究大会で出しております。予算をとる上で、やはり大会となると県、各市町村に対して大分違ってきますので、協議会になるかもしれないと分かっていたのですが、作ってしまった状況があります。いつもこの大会で思うことは、表彰式が非常に時間が長いことです。欠席の方もおられるので、代表だけが前に出なければ時間がカットされるのではないかと思います。以上、私どもは来年度に向けて今後検討を進めながらやっていきますので、ぜひ、各県から沢山参加されて大会を盛り上げていただきたいと思います。

【議長】あり難うございました。

Ⅲ. 特別賛助会員の紹介と挨拶

【議長】特別賛助会員の方々をご紹介します。日進ゴム株式会社、教育シューズ振興会、小島株式会社、株式会社日本体育社、教育シューズ協議会。

【司会】ここで10分間の休憩に入ります。

Ⅳ. ブロック会議

【司会】 まず、ブロック会議の内容、幼稚園部会について会長からご説明いたします。

【会長】 中身については、とにかく幼稚園部会の結成をしたいと思います。出来ない、間に合わないという県は仕方ないので、できるところからやっていただきたいと思います。学体連の中には小・中・高等学校と分かれていたり、合体のところもあると県によってまちまちですが、幼稚園はどこも入っていません。全国大会の公開授業には幼稚園、特殊学校とも1校ずつ入っています。しかし、組織は全くできていません。将来予測として、就業前の幼少期によく遊び、よく学び、授業時間短縮の問題、週5日制の問題などの処理をきちっとやっていくけじめのある習慣づけをしておくことが大切だと思います。就学後では、時間がかかってできないのではないかと危惧しています。

幼稚園部会の設立の可能性として、努力次第でできるという県が34県あります。これは程度、範囲は不明ですが、とにかく努力すれば何らかの可能性はありますということです。「大いにある」が2、「かなりある」が2、「少しある」が11です。合わせて努力次第でできるというのは60%近くあるわけです。私は60%でなくても、10%でも20%でもできるところからやっていくということしかないと思います。本連合会の成立経緯も時間をかけて漸くそれぞれ県が参加をしていただいたということです。時間がかかります。そういうわけでできるところからぜひお願いしたいと思います。何かその他ご質問ございますか。

【質問】 今の趣旨は、幼稚園を一体化して部会を各県に作れないかということですか。

【会長】 そうです。幼稚園を形として入れたいのです。

【質問】 ただ「幼稚園部会の設置について」ブロックで会議をなさいと言っても、これは話のまとめようがありません。事前に、今回のこの会議ではこういうことをやりますからと言えば、各県でも資料を準備できると思うのです。非常に漠然とした問題について会議をやりなさいと言っても無理があると思うのですが。

【会長】 幼稚園部会の結成についてというテーマ

はここ5年以来、ずっと出しています。それは春にも出しましたし、会報にも何回か出ています。そういう事情の下に切羽詰まっております、このあたりで方向づけをお願いして、できるところからやるしかないなというのが今の私の気持ちです。

【質問】 会長の言われる幼稚園が非常に重要だということとは皆理解しています。それを言っているのではなく、われわれは学校体育ということでやっていますが、幼稚園は違うわけです。これを学体連の組織としてわれわれに取り込めという意味ですか。

【会長】 小学校部会の中に入れていただいても結構です。とにかく幼児期を対象にしたもの(研究会)を組織して欲しいのです。本当に幼児が大事だとすれば、そういうこともやはり是非とも、やらねばならないのではないのでしょうか。小学校の先生の感想を聞きたいのですが、宮地先生、いかがですか。

【宮地】 佐賀県の宮地です。幼稚園といっても公立幼稚園、私立の幼稚園があります。県の体育保健課の方で、あるいは教育庁の方でも今言った2つを指導する課も違うわけです。先日、幼稚園の運動会に行きましたが、子どもたちが運動場を走っている様子を見まして、「こういう時代から表現運動、走ることをしっかりやるといいな」という感想はもっています。私個人としましては、幼稚園部会の必要性は理解できたような気がいたしております。県に戻りまして働きかけをしていこうかと思っています。

ブロック会議のまとめ

	全国大会の開催地	体育の諸問題・情報意見交換	幼稚園部会の設置
北海道 東北		体づくり研究、友達・仲間づくりを大事にしている。45分の中で位置づけをどうするか悩みは多い。はぐしのカリキュラム難しい。時数削減のことで中・高で心配だ。あれもこれもは出来ない、重点的なカリキュラムと独自のもので他に影響させていく。	各県で前向きに働きかけていこう。20年の若手県意識をもって大会に望む。
関東	17年以降の大会は資料の通り進めて欲しい。栃木=県に持ち帰り検討する。	具体的な意見は出ず。	何県からかの声として「進めている研究者の研究実践を重ねて欲しい」という意見。幼稚園部会は困難、時間がかかる。
近畿	18年京都となっているが、欠席のため確認が得られない。	持ち帰って各県から3月以内に報告	浅田会長の意向は分かるが難しい。関係者不在の中で話すのは困難。
北陸	17年富山は決定の段階ではないが、準備を進めている。今まで通りの大会を考えている。	教科総合は考えるべきことだが、それぞれの狙いが曖昧にならぬように。健康領域取り組み組めるか懸念がある。	努力はするが難しい状況、金沢は幼稚園少なく公立はない状況だ。
東海	15年に三重で開催、協力要請があった。		三重は国公立で一つの団体になっている。私学にもあったらしいが不詳。15年に「東海・北陸幼稚園教育研究大会」が三重で開催される、手掛かりになると思う。過去の全国大会開催県から幼稚園との接触状況を発表してもらってはどうか。
中国 四国	19年開催予定の島根は、現時点では広島に担当をお願いしたいという意向。(文部省がいう)協議会では県は引き受けられるかどうか心配、学体連の力強い折衝に期待する。	各県が折角集まったのに(ブロック会議の機会を得ても)時間が足りないのは残念だ。	結論出す。幼稚園の実態をどれほど知っているかが問題。数の断然多い保育園をどうするか。
九州	平成22年の九州地区開催地は平成18年までに福岡・佐賀が話し合って決める。	総合学習に保健が入っている。学校体育で保健が薄い。体力づくりは議論を重ねる必要があるという意見が出た。ブロック会議のやり方精査を。	幼稚園部会(作ったとしても)継続出来るか疑問。宮崎=研究部会入れられるか自信がない。全国の幼稚園組織への働きかけで盛り上げる手もある。

【司会】 それではブロック会議の議題について説明いたします。1. 平成17年度以降の全国大会の開催の県について。2. 体育の諸問題、情報交換、意見交換。3. 幼稚園部会設置等の問題について、とこのようなことで会議をもっていただきたいと思います。会議のまとめについては、話し合われた結果をご発表いただきたいと思います。では、各ブロック会でお話し合いをよろしくお願いします。

①北海道・東北、②関東、③北陸、④東海、⑤近畿、⑥中国、四国、⑦九州、7ブロックに分かれて協議がされ、後にまとめと発表が行われた(別表参照)。

閉会の挨拶（金森副会長）

【司会】 それでは閉会の挨拶を金森副会長からお願いします。

【金森副会長】 長時間、あり難うございました。特に、ブロック会議におきましては、大変貴重なご意見をいただきましてあり難うございました。今後の学体連の発展に結びつきますよう頑張っていきたいと思います。これからも先生方のご支援、お力添えを賜りますよう、お願い申し上げます。本日は誠にあり難うございました。(拍手)

【司会】 以上をもちまして、第2回理事・評議員会及び都道府県代表者会議を終わらせていただきます。ご協力あり難うございました。

第39回全国学校体育研究大会基調報告（要旨）

青森県実行委員会研究部

副 部 長 横 山 宏 幸



研究主題設定理由及び研究の方向

現代社会の抱えるさまざまな問題が、形を代え、学校教育の現場にも影響を与え、各校種の段階で、それぞれ重大な問題を抱えるようになってきたことはみなさんご承知のことと思います。学校体育においても、児童生徒の体力・運動能力の低下が指摘され久しいものがあります。また、日常生活及び学校生活における身体活動の機会の減少さらに年齢が進むにつれての運動に興味を持ち活発に運動するものとそうでないものとの二極化などの問題も指摘されています。これらの事柄は、全国的な傾向にあることはもちろん、青森県においても重要な問題とされています。こうした現状において、全ての子どもが運動好きになり、さらに運動を得意になり、生涯にわたって運動に親しむ態度を身に付けさせていくことが、健康で豊かな生活を営む基盤と考えます。このことから、子どもたちの発育・発達段階に応じて、体力の向上や運動に親しむ態度の育成を図り、さらに、生涯スポーツの基礎づくりや豊かな人間性をはぐくむことができる学校体育の在り方を求める研究を深めることとし、大会研究主題「発達段階に応じ、喜びや感動を与える体育学習の在り方」を設定しました。この研究主題を踏まえて、各校種における発達段階と体力面、態度面の向上からつぎのように研究の方向をとらえてみました。

体力の向上について

- 小学校段階までは、巧みに動ける体づくり
- 中学校段階では、動きを持続できる体づくり
- 高等学校段階では、力強さスピードのある動き

運動に親しむ態度面

- 幼児期から小学校中学年までは、運動が好きになる
- 小学校高学年から中学校1年までは、運動の楽しさや喜びを味わえる
- 中学校2年生から高等学校3年生においては、運動が得意になる

学習を支援する教師としての工夫

- 自主的、自発的な学習態度を伸長する
- T・Tの導入などの指導大勢を工夫する
- 課題解決型の学習を取り入れる
- 自らの課題を自らの力で解決させ、喜びや感動を味わわせる
- 障害のある児童生徒は、障害の状態、特性を十分に配慮する

幼稚園部会の研究の概要

幼稚園における教育は、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期であり、地域社会のなかで、幼稚園と家庭が十分な連携をとりながら、幼児一人一人の望ましい発達を促していくことが大切であると考えました。また、幼児期における教育は、小学校段階以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活をとおして、基本的生活習慣の形成・定着、道徳性の芽生え、創造的な思考や主体的な生活態度の基礎などを育てることが重要であります。集団生活を通じて、豊かな人間性や自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、たくましく生きるための健康や体力等の「生きる力」の基礎を培うことが大切な役割であり、子どもたちの「いのちの輝き」を大切にしたいと考え「いのちがやく 友達との育ち合いをとおして」と、部会研究主題を設定しました。また、本来、幼児期の生活は、「遊び」を中心としており、「遊び」は幼児の活動の根幹として大切にされなければならぬものであります。

遊びの本質のとりえ方

- 幼児の内面からの成長の欲求に沿っている。
 - 周囲の事物や他の人たちと多様な仕方で応答し合うもの。
 - 他の人たちとの関わり合いを楽しみ、喜びとしていくことができるもの。
- ととらえ、その中に、試行錯誤、成功や挫折葛藤等を含め、この時期の成長や発達にとって不可欠な体

験が多く含まれていることにより、幼児期の特性や発達段階を踏まえ、遊びをとおして友達との育ち合いを重視した授業実践・研究を進めてまいりました。

小学校部会

今日の小学校期の子どもたちの生活状況を考えると、外遊びや運動不足による体力の低下、核家族や少子化の進行による社会性の欠如などの多くの問題が現れています。これらを少しでも解決するために、学校生活のいろいろな場面において、「運動好きになる」、「運動の楽しさや喜びを味わう」といった体験をくり返ししながら、「遊び・スポーツ」を自分たちの生活のなかに取り組んでいくことのできる能力や態度を培っていくことが大切であり、そのためには、子ども一人一人に学習意欲を持たせ友達と共に楽しさと喜びを味わう体育学習の在り方を追求していく必要があると考え、部会研究主題を「どの子ども意欲を持って運動できる体育学習」として特につぎの3点を研究の重点とし、取り組んでまいりました。

- ①子ども一人一人に、自分の思いや考え、能力にあった課題に取り組ませ、友達と共に活動する場の工夫を図る
- ②共に運動する楽しさや喜びを体験させるための支援の在り方を探る
- ③運動する楽しさや喜びを味わわせるとともに友達との人間関係を深め、運動遊びや運動の生活化を図る

この研究の重点を基本にししながら、4つの分科会では、それぞれの児童の実態を踏まえた研究主題を設定し、主題達成のため研究を進めてまいりました。

第2分科会浪打小学校では、研究推進の重点を「個々の運動に関わる一人一人の欲求や経験・能力等に応じた『めあて学習』の展開の工夫」「一人一人がみな違うという認め合いから出発し、子ども相互の学び合いが高まるための支援の工夫」に置き、研究をすすめてきました。

第3分科会浦町小学校では、研究推進の重点を「一人一人の思いや考えを大切にしたい体験的な活動の場の工夫」「一人一人の思いや考えを効果的に相手に伝えることができる支援の工夫」に置き、研究をすすめてきました。

第4分科会三内小学校では、研究推進の重点を「主体的に学習に取り組ませるための場の設定や自己評価の在り方をさぐる」「運動の楽しさ・喜びを体

感させるための工夫の在り方をさぐる」に置き、研究をすすめてきました。

第5分科会古川小学校では、研究推進の重点を「主体的に学習に取り組ませるための単元構成の在り方や問題意識の持たせ方の工夫」「一人一人の思いや良さを生かし、運動する喜びを味わわせるための支援の工夫」に置き、研究をすすめてきました。

中学校部会の研究の概要

自己に目覚め、自分の役割を果たしながら、自分なりの考えや価値観等を身に付け、自分らしさを形成していく入り口にある中学校の時期には、さまざまな葛藤や悩みが生じ、そんななかで、運動に対する興味関心、体の成長に伴う体力・運動能力の著しい発達など、仲間と共に喜びを分かち合うことが、健全な発達の一助となると考えます。そこで中学校部会では、小学校からの発達段階を踏まえながら、部会研究主題を「仲間との豊かなふれあいのなかで、主体的に取り組む体育学習」とし、「男女共習・領域内選択」等についても研究を進めてまいりました。「豊かなふれあい」の解釈として、高め合い・磨き合う・鍛え合う・認め合うの内容を含むものとし、また、「主体的」とは、自ら課題を持ち解決する・自ら学び考えるものにとらえました。現代の子どもたちは、何かと人間関係が希薄になってきており、学校では仲間としてふれあいの場を持つが、それ以上の関係には進展しないという傾向があります。そんな中で体を動かしながら、安全に気を付け、共に高め合うことを目的としながら授業実践を重ねてまいりました。

第6分科会浪打中学校では、研究推進の重点を「集団的スポーツの中で、個の能力を高め、チームとしての楽しさや成就感を味わえる体育学習のあり方を探る」「体づくり運動の移行の段階で楽しさや喜びを体験できる体操の指導の在り方を探る」に置き、研究をすすめてきました。

第7分科会浦町中学校では、研究推進の重点を「選択制授業により、生涯を通じてスポーツ活動を主体的に実践できる、様々な運動の特性にふれさせる」「自分のレベルや欲求に応じた、自発的・自主的な学習活動をめざす」に置き、研究をすすめてきました。

第8分科会道造中学校では、研究推進の重点を「生涯を通じて運動を実践する基礎的能力や態度の育成を図る」「異学年の生徒たちが共に運動することにより、グループ間の『仲間意識』や『競争意識』を育てる」に置き、研究をすすめてきました。

高等学校部会の研究の概要

自分で課題を設定し、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動する。そして課題をより良く解決する資質や能力をはぐくみ、運動をとおじて、自らを律しつつ他人と協議し、他を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性を養い、たくましく生きるための健康や体力を高めていくことが、これからの体育学習にとっては重要なものと考えました。こうした観点から、高等学校においては、体力の向上や運動に親しむ態度の育成を図り、さらに豊かな人間性がはぐくまれるよう、生徒の特性や発達段階に応じて漸進的・重点的に課題を提示していかなければならないと考え、部会研究主題を「豊かなスポーツライフをめざす体育学習」とし、つぎの6点を体育科の重点目標として実践研究を進めてまいりました。

- ①基礎的な体力・運動能力を高める
- ②力強さとスポーツのある動きのできる体づくり
- ③運動が得意になること
- ④多様な運動に触れてその楽しさや喜びを味わう
- ⑤自分に合った運動を選択する
- ⑥一人一人の能力・適性を伸ばす

また、武道については、全ての生徒が選択できるようにし、体力や運動能力の向上はもとより、自己を制御しつつ相手を尊重する等の心身の健全な育成や、国際化の進展のなかで、スポーツを通じたコミュニケーションの促進や我が国固有の運動文化の理解を深める上で重要と考え研究課題の一つとしました。

これらの授業研究・実践をとおして、生徒たちに、学校、家庭及び地域社会全体のさまざまな運動やスポーツ活動に主体的に参加していく能力や態度を育成することで、生涯にわたる豊かなスポーツライフの形成に結び付くものと考え、研究を進めてまいりました。

第9分科会青森北高等学校では、研究推進の重点を「武道を通して、豊かな心と体を鍛え、自ら問題点・課題を発見し、解決していく能力を育てる体育学習」に置き、研究をすすめてきました。

第10分科会青森東高等学校では、研究推進の重点を「選択制授業を通して、自ら生涯活動していけるスポーツを見つけだす」「個人的な課題、グループの課題、全体の課題、とレベルに応じた課題を自ら設定し、自主的・自発的に解決していく能力を高める体育学習をめざして」に置き、研究をすすめてきました。

特殊教育諸学校部会の研究の概要

現在、さまざまな障害のある人たちが社会のなかで活躍し、社会全体にも障害者と共に生きていくための条件整備をしていこうとする試みがようやくなされ始めています。そうしたなか、体育学習では、障害のある生徒が適切な運動の経験や健康・安全について理解し、心身の調和的発達を図り、明るく豊かな生活を営む態度と習慣を育てることが必要であると考えました。さらに、個々の生徒が自立をめざし、障害に基づく種々の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養うことによって、心身の調和的発達の基盤を培うことも大きな役割であると考え、部会研究主題を「一人一人が生き生きと活動し、スポーツに親しむ意欲を育てる体育学習」とし、重点目標を「生徒が興味を持って主体的に取り組み、成就感を味わうことができる」「生徒が、障害に基づく種々の困難の改善・克服しようとする意欲を高める」「個々の生徒の発達の進んでいる側面をさらに伸ばす」の3点とし、体育学習のみならず、他教科、特別活動及び総合的な学習の時間の指導と密接な関連を保つように、組織的、計画的に指導を行ってまいりました。

青森第二高等養護学校では、同年代の生徒たちと比べて、運動に対して消極的な生徒が多いなか、不安を軽減する、多動性を減少する、自尊心を育むことができるとされている乗馬学習を取り入れることとしました。対人的な運動に慣れない生徒たちに、

- ①知覚・運動能力を向上させる
- ②対人関係のコツをおぼえる
- ③嫌悪感や恐怖を減少させる
- ④積極的な社会性を発達させる

この4点を、馬という友人と共に、大自然のなかで乗馬学習を行うことによって、単に乗馬学習を機能回復訓練とは考えず、体力・運動能力の向上や集中力の育成及び情緒の安定を図り、さらに、障害者の「生涯スポーツ」につなげることができるものと考え、研究・実践をつづけてまいりました。

第11分科会青森第二高等養護学校では、研究推進の重点を「乗馬学習を通して、運動とのふれあひによりおだやかな心情を培い、周囲の人とうまく関わっていける豊かな心をはぐくみ主体的に姿勢を養う」「乗馬により、動物とふれあう喜びを味わい、集中力と多様な運動感覚を養う」に置き、研究をすすめてきました。

— 分科会会場 参観記 —

第1分科会 <会長 浅田隆夫>

栄光学園聖マリア幼稚園 園長 藤林 郁子
研究主題「総合的な保育の中で、園児一人ひとりの命の輝きを大切に、友だちとの育ち合いを大事にした活動と実践を目指して」

教育は伝統であり文化である。文化的継承は長期的伝統を抜きにしては成り立たないことを幼稚園に入ってすぐ感じた。100年近い歴史を持つ幼稚園だが、やっていることは非常に新しい。また、子ども達に接して感じたことは、子ども達の体の大きさにかかわらず、腰から下が細くしまっていることである。走っていても人におつきりそうになったときにすぐとまることができる。下半身が安定していることである。近年では見られなくなった状況である。

総合活動では、各部屋がままごと、粘土、ブロックという製作中心の部屋、お絵描き、まつぼっくりで何かを創る部屋、とびばこ、新聞ハードル、縄とびといった運動表現の部屋がそろっており、子どもたちがやりたいもの、やりたいことを一人ひとりを保障するための空間があり、それを保



〈第1分科会〉

障する教師スタッフがそろっている。遊ぶための遊具は少ないが、子どもたちがやりたいものを自分で選び、持っているエネルギーを十分に発散している。エネルギーを発散しきっているからこそ子どもたちが満足し、また明日という希望(気力)をもてるのである。

ホール中央にある支柱は何のためかということに疑問に思っていたが、感動的であったのがメイボールダンス。12名がそれぞれリボンを持ち、リズムに合わせて歩きながら支柱に綾織をつくる。全員がリズムに合わせて動かないと織り目がきれいにできない。一人ひとりの呼吸が合わなければいけないものである。本来は3学期に行なうものだが、個人としての子どもから集団の中の子どもへの幼稚園での集大成とみることでよい。

この先、子どもたちは、いろいろなものへ挑戦していくだろう。その時には考える力も必要だが、やりぬくための体力が必要である。21世紀はこれらの子どもたちの時代である。この期待に応える子どもの体力・体位は腰から下がしまった子(下半身が安定した子)といえるが、当園の園児は男女・年齢・身長を問わず体位がすべて同じで、まさに「生き生き」した身軽さには感動を覚えた。……など、数々の意見が参加者の先生方から寄せられていた。

注) 本文は担当者代って、藤林園長に執筆を依頼したものである。

第2分科会 <副理事長 友添秀則>

青森市立浪打小学校 校長 前田 龍夫

1. 学校の概要

浪打小学校は、青森市中心部から東に3kmの所に位置し、児童数513名、学級数20の中規模校である。

学校教育目標に「心身ともに健康で、自主的な子どもを育成する」を掲げ、「あたたかく思いやりのある子・進んで学習する子・じょうぶでねばり強い子」を理想の子ども像とし、家庭や地域社会とも連携を図りながら、地域に開かれた学校づくりに努めている。

2. 研究の概要と公開授業

研究主題を「友達と関わり合いながら、運動の楽しさや喜びを求めていく子どもをめざして」に設定し、研究に取り組んできた。特に研究の重点として、

①運動との関わりという視点、②友達との関わり合いという視点を設定し、研究を深化させ、単元構成の工夫や子どもの学びの場の工夫、あるいは教師と子ども、子ども相互の支援の工夫に努めてきた。

公開授業は、第2学年のシュートボール(ボール投げゲーム)と第5学年のソフトバレーボールが行われ、どちらの公開授業とも、本校の掲げる研究主題の授業構想のもとに、子ども達の活発な授業への取り組みがみられた。



〈第2分科会〉

第 3 分科会 <常務理事 蜂須賀 博昭>

青森市立浦町小学校 校長 坪谷 輝子

研究主題「自分の思いや考えを生き生きと表現する子を育てるための指導法の研究」

学校の概要 青森市の中央部に位置し、官庁街、商店街にあり、銀行や公共施設、商店、住宅等が密集している。各学年 2 学級、病院学級 1 の 13 学級、児童数 391 名の、地域・保護者の温かい支援を受けている学校である。

研究の概要 体育科では、表現活動として「生き生きと動く(運動する)」ことがメインとなるが、単に「動き」だけに促われず「運動を楽しむ」「練習や動きを工夫する」「友達と協力する」「意見や感想を発表する」「創作する」などの姿を高めていくことを目指している。楽しさを例にとると、楽しさは、「生き生きとした表現」に結びついていると考え、楽しさを①広々とした場所で、思い切り体を動かせる自由感・満足感、②できなかったものができるようになった成就感、③相手に勝ったり、全力を出して戦ったりしたあとの満足感、④仲間と力を合わせ、助け合って運動することによって得られる親近感、所属感、として促え、このような学習の場をより多く経験させることが、子ども達の喜びや楽しさにつながり、主体的に取り組む姿勢や生き生きと表現する子を育成するとしている。そして、運動の楽しさや

喜びを目指す学習指導は、結果として体力や技能の向上に大いに貢献するという考え方を重視している。このことを全校的にダンスを通して



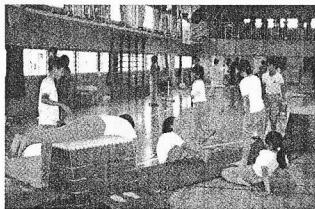
<第 3 分科会>

取り組んだ実践研究であった。

公開授業 授業についての全体説明の後、2 年生が表現リズム遊び、『わくわくミニ旅行』をテーマに、遊園地のいろいろな乗り物に変身し、活発に踊った。続いて 5 年生が『すばやい動き。鋭い動き』を創作表現として、グループですばやさや鋭さのイメージに合った動きを工夫し、楽しく表現していた。最後に 6 年生が互いに振り付けを見合ったり、教え合い、よりよい動きになるよう『リズムダンス』を楽しそうに行っていた。どの学年の児童も明るく豊かな表情で活動していた。グループづくりの配慮、VTR や鏡の活用など体験的な活動の場の工夫、曲のイメージづくりの単元構成の工夫、表現・発表の場と仕方の工夫など、教師がダンスの特性を理解し意欲的に、意図的に、全校体制で取り組んでいる様子がよくわかる。この姿が子どもを育てるの

なテクニカルポイントの提示、指示の工夫。をあげている。さらに、新学習指導要領の趣旨に沿って年間指導計画を見直すとともに、体育施設・器具用具の充実をはかってきた。平成 9 年度からとくにマットと跳び箱を中心に購入している。また、器械・器具の整理とともに運搬台を自作するなど、準備片付けの時間短縮を図った。

公開授業の実際には、3 学年の「基本の運動」器械・器具を使っている運動-跳び箱を「パワフルパワー大冒険」と題して展開された。児童の発想を生かした場づくりが跳び箱やマットその他の器具・固定施設を用いて、4 つのコースとして工夫されている。基礎となる動きも多様になることができるようになっていく休みなく展開する児童の動きにかなり



<第 4 分科会>

第 4 分科会 <常務理事 三原 忠彦>

青森市立三内小学校 校長 増田 知行

本校周辺の西部には、大規模な縄文遺跡として全国的に脚光を浴びている三内丸山遺跡がある。

本校は昭和 52 年には、児童数 1,832 名のマンモス校となったが、その後 3 校が新設され現在は児童数 500 名程度の中規模校となっている。

昭和 57 年度から「きたえよう 心とからだ 三内の子」をスローガンに掲げ、調和のとれた心身ともに健康な子どもの育成を目指している。

体育科では研究主題から『主体的に運動に取り組む運動の楽しさや喜びを体感しながら学習する子』を、求める子ども像として研究授業をすすめてきた。

研究の重点として、ア 主体的に学習に取り組ませるための場の設定の仕方や自己評価の在り方を探る。そのために(ア)めあてに応じた場の設定の工夫(イ)自己評価の工夫 イ 運動の楽しさ・喜びを体感させるための支援の在り方を探る。として、(ア)個やグループに応じた支援の工夫(イ)明確

の運動量を感じさせられる。めあてを確認しながら練習に取り組む工夫もある。大へん活気に満ちた授業であった。

6 学年の「器械運動」(跳び箱運動)は、集団(グループ)的な跳び箱運動を楽しめるようにすることをめあて 2 として設定し、その前段のめあて 1 では

異質グループの活動の中で、個々の技の上達を目指すために相互にかかわり合って喜びを共有できるようにしたいとしている。実際の公開授業の中では、6 年生なりの成長を感じさせて立派な授業となった。当日に至るまでの関係者の努力に対して敬意を表したい。

第 5 分科会 <常務理事 後藤一彦>

青森市立古川小学校 校長 杉田 一

研究主題「意欲をもち、生き生きと運動する子どもを育てるための指導法の研究」

本校は、社会教育施設「古川市民センター」とともに平成 8 年に竣工された新しいタイプの複合施設で、温水プールやオープンスペース等が設置される等、施設が整うとともに、生涯学習の拠点施設としての使命を担う地域に開かれた学校である。

また、職員配置も TT の要員等 4 名が加配され、体育の全授業を TT で実施している。さらに、教育内容・方法についても、文部省や県・市の指定による道徳教育や体育科教育などの研究成果を全教育活動に生かしたり、総合的な学習の時間と体育との横断的指導に取り組む等パイロット型の学校である。

主題に迫るための方策として、次の 4 つの視点が示されている。

- ①「単元構成の工夫」、②「課題意識の持たせ方」③「場の設定の工夫」、④「支援の工夫」。



<第 5 分科会>

第 6 分科会 <副理事長 友添秀則>

青森市立浪打中学校 校長 三上 秀哲

1. 学校の概要

浪打中学校は、青森市の中央を流れる堤川の東部に位置し、生徒数 531 名、学級数 17 の運動施設に恵まれた中規模校である。

学校教育目標に「①自ら学び、深く考える生徒、②協力がきき合う生徒、③いのちを大切にする生徒」を掲げ、これらの教育目標を達成するために、日々研鑽に努力している。

2. 研究の概要と公開授業

研究主題を「仲間との豊かなふれあいの中で運動に親しみ、自ら健全な心身を培い、積極性をはぐく

に即し、主題に迫る充実した 3 つの授業が公開された。

下記に各授業の個別の特色を記す。

- (1) 4 学年「水泳：すいすいスイミング」
体ほぐしの運動の趣旨を取り入れた活動から始まり、今もっている力で楽しむリレーを行い、めあて別の 6 グループによる学習へと発展する学習の流れを子どもがよく理解し、且つ互いに教え合いながら努力する姿が見られ、4 年生として主体的な「学び方」のあり方を示す授業だった。
- (2) 5 学年「表現：はくらの自然にズームイン」
八甲田山やりんごなどの郷土の自然や産物等を題材とした表現活動の中に、子どもたちの郷土愛や仲間と一体となっておどる喜びなどがキラキラと輝く情感が溢れる授業であった。
- (3) 6 学年「陸上：記録にチャレンジ！ハードル走」
40m 走の記録をハード走のめあての決定やグループ間の得点競争の指標に活用したりする等に工夫のある授業であった。また、ハードリングの練習場面では、場の設定が多様且つ有効で、技能の向上や人との豊かな関わりを引き出す働きが見られた。

む体育学習」に設定し、研究に取り組んできた。特に研究の重点として、①自己教育力を高める指導過程のあり方の探求、②集団的スポーツの中で楽しさや成就感を味わえる学習のあり方の探求、③体づくり運動への移行に伴う体操の指導のあり方の探求に努めてきた。

公開授業は、第 2 学年の「体操」と第 1 学年のバレーボール



<第 6 分科会>

が行われ、研究主題に生徒達の活発な授業への取り組みがみられた。また、公開授業の後、選択教科として、生徒達が取り組んできた「日本剣道形」の発

表が行われ、見事な演技に参加者から大きな拍手が起こった。

第 7 分科会 〈常務理事 蜂須賀 博昭〉

青森市立浦町中学校 校長 中田 瑞穂
研究主題 「仲間との豊かなふれあいの中で、楽しさや喜びを分かち合う体育学習」

学校の概要 各学年 5、知的障害 2、病弱 1、情緒 1 と、それぞれ独立した学級を併設した 19 学級 537 名。青森市のほぼ中央の住宅地と商店街で構成される地域に、広大な運動場を有する地域に開かれた学校、生徒は相互の人間関係も良好で、学校のきまりを守り、約 8 割以上が学校を楽しんでいる。

公開授業 はじめに全体で授業説明があり、つづいて第 3 学年と第 2 学年の公開授業が、領域内・種目選択男女共習の方法で、2 時間に分け、体育館で実施された。第 3 学年は器械運動（マット運動・平均台・跳び箱運動・鉄棒）、第 2 学年はバスケットボールとバトミントンの選択であった。選択制授業により、生涯を通じてスポーツ活動を主体的に実践できる、様々な運動の特性にふれることができる。自分のレベルや欲求に応じた自発的自主的学習活動ができる等を目指すものであった。

授業参観の視点 器械運動では、①個人の能力に応じた技の選択をし、よりよくできるよう組み合わせを工夫しながら練習しているか、②グループで教え合ったり補助し合ったりして、互いに協力しながら取り組んでいるか、2 年生のバスケット・バドミ

ントンでは、①一人一人が意欲的に練習に参加し、楽しんでいるか、②相手に応じた作戦を立て、役割をもって取り組んでいるか、③基礎的技能を身につけ、攻防を工夫してゲームをしているか、に注目したが、教師間の共通理解・協働体制に基づく授業展開であり、T・T の指導法のよさが発揮された生徒本位の活気ある授業であった。

あわせて、女子の鉄棒、男子の平均台は、男女共習の利点であり、従前の考え方にとらわれない学習活動の様子がうかがえ、温かささ感じられるものであった。また、鉄棒の逆あがりを見る柔道の帯を使用した補助指導の工夫は、指導法の研究の大切さを改めて感じさせるものであった。

自己のチームや能力に合った課題の設定、男女共習による個性の尊重のし合い、課題解決のための協力のし合い等は、テーマに沿った学習活動がまに行われているものと感じた。「できた！うれしい」の館内に響いた女子生徒の叫び声が印象的だった。



〈第 7 分科会〉

第 8 分科会 〈常務理事 金森 久〉

青森市立造道中学校 校長 笹 武志
本校は 21 学級の大規模校で、平成 5・6 年にか、新校舎及び体育館・武道館が完成し、教育環境に恵まれた学校である。

生涯スポーツの基礎を育むために、①仲間との運動の触れ合いの中で、共感し合い、助け合い、競い合いながら楽しく学習を進めていくことができる。②運動の楽しさや喜びの中に、自ら課題を見つけて学習を進めていくことができる。この 2 点を考え、さらに、生徒の主体的学習活動を中心に据えた授業への転換を図るため、「仲間との豊かなふれあいの中で自ら進んで生き生きと活動する体育学習」を研究主題とした。研究の重点として、①一人一人の興味・関心や技能を生かす学習過程の工夫。②異学年（縦割り）の生徒たちが共に運動することにより、グル

ープ間の「仲間意識」や「競争意識」の育成。をあげている。

第 1 学年 2 学級（男子 35 名女子 36 名）、第 2 学年 2 学級（男子 38 名女子 38 名）の異学年合同による体操（体づくり運動）の授業を見学した。男子 3 名、女子 2 名の指導者により、体育館・武道館で行われた。各グループとも男女別に 1 年生と 2 年生混合の 6～7 名で、24 グループに編成されていた。

準備運動は音楽に合わせて、ランニング、ストレッチ、リズム体操を行った。次の体力を高める運動は 8 種目が設定され、決められた順序で移動して行った。終了後、運動の効果を確認するため脈拍測定（30 秒）を全員で行った。また、8 種目中、後期の 7 時間目からは生徒が工夫した運動を 4 種目取り入れられていた。次に、体ほぐしの運動として男女混合のグループで、スティック、リングを利用してキャッ

チを行った。さらに、夏休みの課題として「トレーニング手具・用具の考案や学校施設の利用の工夫をして、体力を高めるトレーニングをつくりだそう」を生徒に示し、実践させていることはすばらしい。

第 9 分科会 〈幹事 古川 浩洋〉

青森県立青森北高等学校 校長 江良 孝昭

本校は、教職員 73 名（体育 6 名）、生徒数 958 名、24 学級の大規模校である。昭和 16 年「市立第一中学校」として開校し、同 23 年の学制改革で「市立青森第一高等学校」、同 44 年に県立移管をして「県立青森高等学校」となり現在に至っている。その後昭和 59 年、新校舎の改築に伴い油川地区に移転し男女共学の普通校として再スタートを切った。開学以来の男子校としての気概を今に残し「文武両道」の精神を重んじ、勉学に力を注ぐとともにスポーツにも盛んである。冬場の積雪期間にはほとんどの生徒が列車通学に変わり練習時間が制約されるなか、全国的に活躍している部活動が多く、その実績を買われた平成 12 年、県下初の「スポーツ科学科」が設置された。体育施設はサッカー場兼用 300m トラック、ラクビー場、テニスコート、野球場等があり、屋内施設としては 2 つの体育館、柔・剣道場と充実している。新学科の設置に伴い、生徒の意識も変わりはじめており、施設整備の一環としてトレーニング室を現在建設中である。

開校以来の学校経営の柱である「武道」を通して、男女共習で自己の能力に応じて自ら工夫して「技」を習得した喜びや競い合う楽しさを味わわせ、相手に立ち向かう気迫と勇気を身につけさせ、「逞しく豊かな心と体」を育むことを課題とし、「武道をとおして、逞しく豊かな心と体を育てる体育学習」を研究主題に設定し取り組んできた。

異学年の生徒たちが一緒に活動することによって、上級生が進んで助言・補助にあたり、下級生も上級生を見習って自分の役割を理解し参加するようになったことを成果の一つとしてあげている。

公開授業Ⅱとともに男女共習による武道の領域内選択制授業（柔道・剣道・なぎなた）を実施した。体育授業での選択制は平成 4 年度にはじまり、同 6 年度には男女共習、同 7 年度に女子になぎなたを取り入れ、同 11 年度から男女共習による武道での選択制授業を行っている。公開授業Ⅰが 1 年生 3 クラス（うち 1 クラスがスポーツ科学科）で、つづく公開授業Ⅱが 2 年生 2 クラスで授業で行われた（いずれも 12/15 時間）。特になぎなたの授業実践は初めて観るものであり大変興味深く拝見した。いずれの授業も学習ノートを活用しながら展開されており、運動部に所属している生徒やスポーツ科学科の生徒がリーダーシップを発揮しながらグループ学習がなされていた。なぎなたの演技競技では、紅白のハチマキを用い各自で判定しその合計によって勝敗を決定したり、判定について複数の生徒がコメントする場面もあり、評価活動に工夫もみられた。また、これら武道の三種目は学校行事にも取り入れられており、校内体育大会の武道部門としてクラス対抗で行われ、授業の成果を発表する場であるとともに体育大会の中でも一番の盛り上がりもみせている。



〈第 9 分科会〉

第 10 分科会 〈常務理事 金森 久〉

青森県立青森東高等学校 校長 大澤憲一
各学年 9 学級（今年度は第 1 学年 8 学級）の大規模校で、開校以来進学校として実績をあげると共に、約半数の生徒が運動部に所属するなど明朗活発な雰囲気を感じる学校であった。

平成 6 年度から選択制授業を実施してきた結果、生徒個人の考え方や行動の多様化が進み、集団が一つの目標に向かって協力的に行動することが難しくなっている。そこで、より効果的な選択制授業のためには、とくに、次の事項について研究・工夫することが必要である。①生徒が自ら考え、課題を設定す

る。②課題解決のために小集団の学び合いを大切に。③生徒の主体性を引き出すための教師の関わり方。以上のことから、「自ら課題を設定し、ともに助け合い、高め合いながら解決する体育学習」をテーマに設定し、どのようにしたら生徒が自主的に意欲を持って計画的に取り組めるか、実践をとおして研究することになった。

第 3 学年の選択制授業を見学した。3 学級（男子 52 名、女子 70 名）が次の 7 種目の学習を 4 名の指導者によって行っていた。ソフトボール、バドミントン、卓球の 3 種目は男女が選択し、男女別に学習した。マット運動、バスケットボールは男子が、バレ

ーボール、ソフトテニス、ゴルフは女子が選択していた。ここでは、選択制授業ではあまり見られない男子4名によるマット運動と女子6名のゴルフについて述べる。ロイター板やウレタンマットを使用して、ロングド、後方宙返りなどを行い、その連続技を練習していた。技の高さから体操部の生徒と思うが、指導者が常時いないので安全の面で疑問が残った。女子のゴルフは野球場の外野の場所で行われていた。生徒が設置したホール（カラーフープ）で

マッチプレーを楽しみながら勝負を競っていた。

課題を設定して自主的、意欲的に活動しているが、最終的に課題を解決している班は約6割である。しかし、生徒が楽しかった、一致協力して出来た、良い仲間にも恵まれたなど生涯スポーツへの動機づけについては成果が大きかった。指導者の指導や助言の程度と範囲は今後の重要な課題であると述べている。

第11分科会 〈常務理事 椎木秀蔵〉

青森県立青森第二高等養護学校校長 佐藤 鷹敏
青森第二高等養護学校は、生徒数103名、学級数12、教職員数70名であり、軽度の知的発達の遅れのある生徒のために設置された学校である。将来は職業に就き、自立できる力を養成するために、農業、工業、家政、クリーニングの4コースを設置している学校である。

教育の重点目標「一人一人の生徒が、生涯にわたって自ら進んで運動に親しみ、健康で充実した生活を送る能力、態度の育成」の具現化を図るために、研究主題に「乗馬学習を通して集中力の育成と情緒の安定を図ることを目指して」を掲げ、(ア)馬になれる。(イ)順番を守る。(ウ)知的、運動感覚、集中力の向上を図る。(エ)対人関係の改善を図る。(オ)積極的社会参加への意欲の向上を図るを研究内容としている。

研究の方法としては、生徒の学習段階に応じてグループ編成を行い、生徒一人一人に具体的な学習のめあてを持たせる学習活動を展開することにした。

当日の授業は、学校担当者13名、乗馬クラブからの指導者（インストラクター）3名の指導のもと生徒35名が三つのグループに分かれ、グループごとに、「乗馬姿勢、位置、停止等の基本動作」「ターン

オーバー」「サークルラウンド」等、具体的な学習のめあてを持たせて学習に取り組んだ。

研究の成果として

- (1) 生徒全員がたんに馬に乗れるというだけでなく、乗馬学習を通して自ら積極的に働きかけができるようになるとともに学習活動全体に大して積極的に取り組むことができるようになってきた。
 - (2) 学校で行う体育だけでなく、卒業してからの生涯スポーツということにも広がりを持たせることができた。
- 教職員全員に、乗馬経験がないこと、インストラクターとの連携の仕方、グラウンドの設定、馬の搬送や予算の確保等、課題も多いが、生徒と馬のふれ合いを通して、生徒や馬の表情のなかに「人馬一体感」が生まれていることが何れ、対人関係に必要な心情面の育成にも有効であることが確信できる授業であった。



〈第 11 分科会〉

月刊「学校体育」編集協力者一覧（北から・敬称略）

新開 央（北海道教育大学函館校教授）	今 範男（新潟県教育庁保健体育課指導主事）
丸谷 一（北海道教育庁スポーツ保健体育課指導主事）	橋爪 和夫（富山大学助教授）
増田あけみ（青森県教育庁スポーツ健康課指導主事）	宗倉 啓（福井大学助教授）
高橋 幸一（山形大学教授）	原田 憲一（岐阜大学助教授）
武田 裕志（山形県教育庁スポーツ課指導主事）	堀部 マサ（岐阜県藤橋村立藤橋中学校教頭）
森 知高（福島大学教授）	伊藤 安（静岡大学教授）
尾形 幸男（福島県教育庁スポーツ健康課指導主事）	永田 清康（愛知教育大学教授・副学長）
三浦 忠雄（茨城大学教授・附属小学校校長）	伊藤 孝思（愛知県教育委員会体育スポーツ課指導主事）
松本 順一（宇都宮大学教授）	山本 俊彦（三重大学教授）
西 富子（群馬大学教授）	沢田 和明（滋賀大学教授）
吉田 茂（埼玉大学教授）	和田 尚（京都教育大学教授）
中村 康弘（千葉市教育委員会保健体育課指導主事）	後藤 幸弘（兵庫県教育大学連合大学院教授）
真如 昌弘（東京都米市立第一小学校校長）	小林 勢治（奈良県教育委員会保健体育課指導主事）
荒木 豊（放送大学山梨学習センター所長）	油野 利博（鳥取大学教授）
岩田 靖（信州大学助教授）	平井 章（鳥取大学教授）

2001年4月現在

第39回全国学校体育研究大会（青森大会）を終えて



青森県実行委員会
会 長 岩 見 幸 夫

平成12年10月26日（木）27日（金）の両日、前日の雨も上がり、肌寒い気候ではあったが、第39回全国学校体育研究大会青森大会が秋深まるみちのく縄文の里青森市で、全国から学校体育関係者約2,000名の皆様をお迎えし2日間開催されました。

平成9年度にこの大会を青森県で開催できないかとの依頼を受けてから、県学校体育研究連合会では、県・市の教育委員会とともに、交通の利便性、全国からの参加者の宿泊等の様々な条件より青森市以外での開催が困難であると判断し、本大会で青森市で開催と正式に決定したのが平成10年6月でありました。

組織的にもこれまで小学校・中学校・高等学校の各研究組織の連合会であったものに、幼稚園、特殊教育諸学校を新たにくわえ、研修と組織力の強化に努めました。

本大会の研究主題としては、県教育委員会の御指導と御助言をいただき、児童生徒が運動の喜びや感動を味わうためには、児童生徒の発達段階に応じた運動課題や指導・支援の仕方が大事になってくるのではないということから「発達段階に応じ、喜びや感動を与える体育学習の在り方を求めて」と決定し、各校種別に部会主題、各校・園毎に研究主題を定め、それぞれの学校・園の用事・児童・生徒の実態や地域の実情を把握し研究を進めて参りました。

全大会は26日の青森市文化会館において開会行事・表彰式のあと、実行委員会研究部がパソコンのプレゼンテーションソフトを用いて基調報告を行い、研究主題の設定理由、分科会での各校での研究の取り組みを紹介し、公開授業の参考とさせていいただきました。昼食後の公開演技では青森の子供達の躍動感を「新体操」と「ねぶた祭」を題材に小学生と高校生を中心に創作演技を行い、短い時間ではありましたが、参加者に多くの感動を与えてくれました。

次いで「学習指導要領の改訂とこれからの授業づくり」と題して文部省体育局池田延行体育官より教育課程の改訂の基本的な考え方と方向性ととともに、今後社会から求められていく学校の在り方の中で、

体育の果たす役割の大きさを考えさせられました。

第一日目の最後に県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室文化財保護主幹岡田康博氏より、「三内丸山と縄文人の暮らし」と題して記念講演をいただきました。縄文人が多くの技術と文化を持って、豊かな自然の中で生活していたことは、心と体を一体としてとらえる体育の在り方に一つの考え方を示していたのではないのでしょうか。

二日目(27日)はこの時期にしては天候に恵まれ、グラウンドを使つての授業も予定通り行うことができました。各会場とも子ども達は一生懸命活動し、大成功の裡に二日間の全日程を終了することができました。

27日に開催された次期開催県との打合会は、第40回大会開催の宮崎県をはじめ、41回大会北海道、42回大会三重県を交えて行われ、時期開催県の意気込みを感じるとともに、大会の準備は遅くとも大会開催年の3年前から取りかからなくてはならないと思われますので、次年度以降もこのような形で開催される事が望ましいと思われました。

青森大会を開催するに当たり、文部省をはじめ日本学校体育研究連合会、青森県教育委員会及び青森市教育委員会の絶大なる御指導と御支援を賜りましたことを紙面をおかりして衷心より厚くお礼申し上げます。

さらに、各分科会において的確な指導助言をしていただきました講師の先生方のおかげを持ちまして充実した研究協議を実施することができました。

快く公開授業をお引受いただきました各校・園の皆様、また各会場で運営・設営に携わっていただきました本県関係者の方々、そして、全国各地より参加していただきました先生方々様々な方の御協力があってこの二日間大成功に終えることができました。本当にありがとうございます。

最後にこの大会の運営・企画等適切な御助言をいただきました茨城県学校体育研究会に対し厚くお礼申し上げますとともに、第40回宮崎大会の成功を祈念して報告といたします。

本年度全国大会（宮崎県）を迎えるにあたって

宮崎県実行委員会
会 長 竹 村 義 政



平成13年度全国学校体育研究協議会（仮称）・第40回全国学校体育研究大会が宮崎県で開催されるにあたり、ごあいさつとご案内を申し上げます。

第35回秋田大会で平成13年度の大会を宮崎県で開催されることが決定、21世紀の幕開けの第40回と言う記念すべき大会を全国にアピールし、宮崎らしさを豊富に盛り込んだ大会を開催するため準備をしてきました。

しかし、文部省から文部科学省に改編する段階で、主催行事の見直しがあり、今までの研究大会と異なった研究協議会が提示され、関係各位と協議を進めてきました。文部科学省が示す協議会の要旨として「近年の児童生徒等については、日常生活の利便化、都市化、外遊びの減少等により、運動する機会が減少し、体力や運動能力の低下傾向が続いている。この状況の中では、学校における体育や運動部活動を行う機会が大変重要となっている。また、平成13年度からは、児童生徒の体力向上、生涯スポーツの振興、国際競技力の向上を目指したスポーツ振興基本計画に沿った取組を行う。そこで、スポーツ振興基本計画を円滑に実施し、児童生徒に運動に親しむ資質や能力を身に付けさせ、体力を向上させるため、教育関係者等に限定せず、体育・スポーツの研究者など様々な参加者が一同に会し、国として今後行っていく体育・スポーツ行政に理解を求めるとともに、体育・スポーツに関する研究成果や先進的な事例の紹介及びシンポジウム等を行い、中央の情報提供と最新の研究成果等を共有することで、これからの学校体育の充実に資する。」この要旨にもとずき今後、文部科学省・日本学校体育研究連合会のご指導を受けながら、宮崎らしい、今後の学校体育を見据えた協議会・大会になるよう準備を進めていきます。

児童・生徒を取り巻く環境の変化で、学校教育は多くの課題を抱えています。大きなうねりの中で、21世紀を展望したわが国の教育の在り方も変わろうとしています。

新しい教育課程は学校・家庭・地域社会連携の下、ゆとりのなかで一人一人の子どもたちに「生きる力」を育成することを基本的なねらいとして改訂

され、体育教育においては「健康を保持増進できるようにし、基礎的な体力の向上を図る」「生涯にわたって積極的に運動に親しむ資質や能力の育成を図る」ことが重要であるとしています。

本県では、幼稚園より高校・特殊学校までの一貫した研究協議を重ね小・中・高校における同時公開授業（系統的授業・つながりのある学習）を一堂に集めての発表も行ってきました。

研究主題の設定において、これからの学校体育の役割は、子ども一人一人に運動を行う楽しさや喜びを体験させつつ、健康の保持増進・体力の向上等に関しても基礎的な知識や実践的な態度を培い、生涯にわたっての運動やスポーツ実践の基礎づくりをすることであると考え「子どもたちが自ら進んで運動の楽しさや喜びを体験し、仲間と一緒に、夢中になって取り組む運動遊び・体育学習のあり方を求めて」としました。

私どもは、この協議会・大会に参加の全国の皆様方に、日頃研究されていることや考えを積極的に出していただき21世紀に生きる児童・生徒が力強く生きる方向付けができるような、意義のある研究大会ができるよう努力したいと思っています。

宮崎大会は平成13年11月8日（木）9日（金）の両日宮崎市を中心に開催します。内容については文部科学省・日本学校体育研究連合会と検討中ですが1日目全大会をシーガイア・サミットホールで、2日目の分科会を宮崎市内11会場で公開授業・研究協議を行います。

「太陽と緑の国」「神話と歴史のふるさと」宮崎は自然が豊かなところですが、新しい街づくりも進めています。国際会議場やスポーツを楽しみながら過ごせるリゾート・キャンプ地として条件整備も進めています。丁度この時期には、巨人軍キャンプ・ダンロップゴルフ大会が開催されるときでもあり、大会終了後にお楽しみいただければと思います。ぜひ、多くの方にお越しいただき、秋深まる日向路を味わっていただきたいと思います。

宮崎大会成功のため、今後のご指導・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

Network 地区(北から南から)だより

岩手県学校体育研究協議会の歩みと現状

岩手県学校体育研究協議会
理 事 長 浅 見 裕



1. 研究協議会設立の沿革

昭和33年から東北学校体育研究大会が東北各県持ち回りで開催された。この第4回大会の岩手県開催に向けて、昭和36年2月に岩手大学学芸学部体育科教員の平田桂一氏を会長に、当協議会の前身である「岩手県学校体育研究会」を設立した。ここでは岩手県内の国立私立幼稚園・小学校・中学校・高校・大学の教員が会員となった。

昭和37年9月に第4回東北大会と第1回岩手県学校体育研究大会を兼ねて開催し、公開授業・授業研究会・講演・研究発表を内容とした研究会の事業がスタートした。研究大会は平成2年の第29回大会まで80~200名の参加者規模で毎年開催（岩手県・盛岡市教育委員会との共催）をしていた。昭和59年からはスキー実技研修会を開催し、幼稚園から大学教員の参加のもと毎回100名近くの参加者を得て平成11年まで実施してきた。

昭和47年11月には個人会員加入形式から学校種別団体加盟形式とし、国公立幼稚園・私立幼稚園・小学校・中学校・高校・大学の各部会からなる「岩手県学校体育研究協議会」に改称した。会の目的は「学校体育に関する研究を支援し、組織団体相互の連絡を図り、学校体育の振興を図る」である。その後、平成6年度に国公立幼稚園部会が退会し、大学部会も平成3年度以降活動協力が疎遠になり、岩手大学に事務を一任したまま現在に至っている。

平成12年度の加盟組織は、社団法人岩手県私立幼稚園連合会・岩手県小学校教育研究会体育部会・岩手県中学校教育研究会保健体育部会・岩手県高等学校教育研究会保健体育部会であり、会長は初代の平田氏以降、加藤昌得（アレン短期大学）・金田一芳美（岩手大学）・伊藤章一（同）・太田利彦（同）の大学教官諸氏が任を務めてきた。

2. 組織改革

平成6年度に組織検討委員会を開催し、これまでの事業など見直し、スキー実技研修会他に研究報告会（平成7年~9年）、研究助成（平成8年~9年）を行った。しかし、この数年間の当協議会の活動はスキー実技研修会（校種別毎の参加者に偏りが出る）と表彰者の推薦に限定されたものになってい

た。

現在、小学校・中学校・高校の体育活動の一貫性が強く求められている。岩手県内では、これまで各校種別毎に行っている研究大会・研究活動も、連携と連絡・調整をより一層深めていくことが肝要である。そこで、平成12年度にも検討委員会を再度構成し、これまで岩手大学に一任してきた運営業務を、平成13年度から小・中・高校の各部会事務局がローテーション方式で受け持つことに変更した。

3. 部会の活動

岩手県には岩手県教育研究会保健体育（体育）部会が小・中・高にそれぞれあって活動している。小学校部会では毎年、盛岡市と盛岡市以外で隔年交互に研究大会を開催し、公開授業と授業研究会を中心内容としている。中学校部会では、毎年盛岡市において研究大会を開催し、授業についての研究発表と部活動についての研究発表、それに講演を内容としている。高校部会では、高体連に高校教育研究会と研究部会とがあり、後者は部活動のことに取り組み、前者は実技研修と講演を毎年行っている（当協議会と関連があるのは前者である）。

4. 今後の課題

当協議会では、各校種別部会の連携を強化することを柱に、今後の活動に取り組んでいくことになった。すでに小・中の間では研究大会を合同開催の方向で検討されている。このような方向性は中・高、幼・小でも検討されるべきであろう。

ただ残念なことに、平成13年度から私立幼稚園連合会が退会することになり、当協議会から幼稚園を代表する組織が皆無になってしまった。今後、全国学校体育研究大会を岩手県で開催する予定もあり、それまでには組織の再構築を果たし、子どもたちの健やかな発育発達に寄与する研究活動に取り組んでいかねばならない。

その際、他教科専門の教員でも指導が可能な部活動だけに当協議会の研究活動がとどまるのでは、必修としての教科体育の存続も懸念される。他教科の教員では真似（実現）のできないような素晴らしい体育授業の成果・評価を得るための授業研究にも力を入れていかねばならない。

「奈良県」学校体育研究会の現状

奈良県学校体育研究会
会 長 中 林 悠



1 研究会のあゆみ

本研究会は1979年（昭和54年）岩田渾一氏を初代会長として、それまで各校種毎での取り組みを行っていた奈良県小学校体育研究会・県中学校保健体育研究会・県高等学校保健体育学会を加盟団体として発足する。1995年（平成7年）高等学校保健体育学会に障害児教育諸学校体育担当者が加盟することにより、小・中・高・障害児教育諸学校（特殊教育諸学校）の体育指導者の加盟団体となる。

研究会発足依頼各当該年度担当校種の会長を研究会会長・理事長を研究会理事長として1年間の任期で会務の遂行にあたってきたが、1997年（平成9年度）の第36回全国学校体育研究大会（奈良大会）を開催するにあたり1995年（平成7年）より理事長を高等学校理事長とする。

1998年（平成10年度）より、全国大会が終了したことを受けて、理事長を1995年（平成7年）以前の各校種の持ち回りという形に戻す。

2 研究会の目的及び事業

本県学校体育の指導者の資質向上を図り、学校体育の発展に寄与することを目的とする。

事業としては、学校体育・保健学習に関する調査研究。体育指導力の充実・向上。学校体育に関する研究大会の開催等を行っている。

なかでも、本研究会設立時（昭和54年）より開催している。奈良県学校体育研究会は本年度で22回を数え、その時代に応じた研究テーマを設け小・中・高各校種連携を取りながら一体となって課題解決・研究推進をおこなってきた。

平成12年度の研究大会では、新学習指導要領の目標「心と体を一体としてとらえ…」の「心」の部分にスポットをあて、「子どもたちのこころの発達について」の演題のもと、奈良県精神保健福祉センター所長 平尾文雄先生に講演をいただくとともに、次代を担う児童生徒が、生涯にわたり心身ともにたく

ましく、活力に満ちた生活を営む能力や態度を養うことを目標に四つの分科会において、分科会研究テーマ『第1分科会』体力づくりをどう進めればよいか（体育的活動の取り組みから）。『第2分科会』運動の特性を生かした、楽しい授業の展開と評価をどうすればよいか。第3分科会：主体的に取り組む保健学習（保健指導を含む）の進め方をどうすればよいか。第4分科会：指導計画をどう工夫すればよいか。（生涯学習を目指した小・中・高の果たす役割について』のもと小・中・高・障害児教育諸学校の指導者が一つのテーブルでそれぞれの立場から、熱心な研究発表・研究協議・活発な意見交換を行い、各校種の理解と連携を深める有意義な大会となった。

2 第36回全国学校体育研究大会（奈良大会）

1997年（平成9年度）第36回全校学校体育研究大会（奈良大会）では、「21世紀を生き抜く、生涯体育・スポーツの深化を図る学校体育・保健体育のあり方を求めて」を研究主題に生涯体育と学校完全五日制を眼下にし、生涯を通じて運動、スポーツを楽しむ、活動し、自分の身体に関心を持てる子どもたちの育成をめざし、学校体育という場で、その基礎、基盤を培うにはどうあるべきかをテーマに研究を重ね、幼1・小4・中3・高3・障1計12分科会において実践発表を行い、日頃の本県学校体育の取り組みを全国各地から参加の2200名の先生方に披露するとともに、ご指導・ご助言をいただき、以後の本県学校体育の充実・発展に向けて大きな収穫であった。

3 課題

22年間にわたり小・中・高の連携のもと、本県学校体育の充実・発展を目指して取り組んできたが、今後、更に縦の連携を密にするとともに、各校種共通のテーマのもと、一貫教育を目指して組織の強化を図っていきたい。

(財)日本学校体育研究連合会小史

1 (財)日本学校体育指導者連盟の誕生

昭和21年文部省体育官補吉田清（日本大学名誉教授）は、東京体専校長大谷武一、東京高師教授今村嘉雄の方々と相計り、学校体育指導者団体の結成へと動いた。

当時は、終戦直後のことで、国民生活は困難・欠乏を極めた。当然、学校教育資材は皆無に等しかった。このままでは、国の復興の大原動力となる青少年の健康・気力・体力が低下する。そのためには体育を振興させねばならないということになった。

そこで、国に体育用資材、指導用衣料、食糧の増配などを陳情するためにも、また、配給の受け皿を作るためにも、前記団体の結成を急ぐ必要があった。このような時代の要請から昭和22年5月頃、日本学校体育指導者連盟が結成され、事務局は大塚窪町金子書房内に置き発足した。昭和22年末頃体育衣料や体育用品の配給があった。昭和25年2月23日日本学校体育指導者連盟は、財団法人として認可され、各都道府県毎の連合会を支部として組織し、活発な活動を進めた。

昭和30年3月、連盟は事務局を学習院大学内に移転した。この頃より連盟は、指導者の福利厚生、体育資材の配給、親睦などの本来的な役割を果たし、次第に体育指導者の資質の向上への重点施策を転換した。

2 (財)「学体連」の設立

前述のような情勢の中で、昭和37年3月10日、(財)日本学校体育指導者連盟は発展的に解消し、(財)日本学校体育研究連合会が設立された。この設立に当っては、文部省西田剛体育課長および全国体育主管課長会議の指導と協力を得た。

改組後、(財)「学体連」は意欲的に諸事業を行った。その主なものは次の通りであった。

全国学校体育優良校表彰、全国学校体育研究大会、学校体育指導者講習会、機関紙の刊行、図書の刊行、組織の充実、など多彩に亘った。

3 (財)「学体連」の事業概要

- (1) 全国学校体育優良校表彰
昭和26年（第1回）、平成12年（第50回）
- (2) 全国学校体育功労者表彰
昭和46年（第1回）、平成12年（第29回）
- (3) 全国学校体育研究大会
昭和37年（第1回）津田沼小学校主会場、参加人数3,000名、平成12年青森大会（第39回）。毎回

平均約2,500名の参加を得ている。この大会は、13年宮崎県、14年北海道（周年記念全国大会を予定）、15年三重県、16年徳島県、17年富山県、18年京都府となっている（文部省共催）。

(4) 全国学校体育指導者講習会

平成11年までに幼稚園・保育園の部及び小学校の部は31回、中学校・高等学校の部は10回を実施。毎年開催。

(5) 図書刊行

機関紙「学校体育」月刊（かつて、学校体育の研究、体育評論など若干）会報平成12年第37号。昭和55年～62年ごろに亘り、スポーツ断想3巻、親と子のライフ&スポーツ12巻、現代小学校体育全集13巻刊行など。これらの図書刊行は、大石三四郎会長、浅田隆夫常務理事の熱意と努力により実現した。また、毎年全国大会研究紀要、実践研究資料集など発行。

(6) 組織の充実

昭和45年の加盟団体数は36団体であったが、昭和49年今村嘉雄会長は未加盟県を行銷して加盟を促進し、大石三四郎次代会長も努力され、昭和58年組織率100%となった。

(7) 学体連の資金

終身賛助会員、特別賛助会員－児島綱、日本旅行及び、教育シューズ振興会（会長・渡辺昌平）などへの賛助会費や寄付金、ならびに分担金などによって賄われている。

4 (財)「学体連」の歴代会長

- 初代故大谷 武一（元東京体育大学名誉教授・元東京体専校長）
昭和25年2月23日～昭和30年10月1日
- 2代故東 俊郎（元日本体育協会専務理事・元順天堂大学体育学部長）
昭和30年10月26日～昭和42年10月1日
- 3代故栗本 義彦（元日本体育大学長）
昭和42年10月10日～昭和48年3月31日
- 4代故今村 嘉雄（東京教育大学名誉教授・元東京教育大学体育学部長）
昭和48年5月25日～昭和53年7月20日
- 5代大石三四郎（筑波大学名誉教授・元筑波大学副学長）
昭和53年8月14日～平成6年5月20日
- 6代浅田 隆夫（筑波大学名誉教授・元筑波大学学校教育部長）平成6年5月～現在

Gakutairen 事務局だより

1. 平成12年度 常務理事会の議事摘要

副理事長 三 原 忠 彦

平成12年度の常務理事会の議事摘要は以下の通りです。

1201回常務理事会 (H12, 4/15 土)

- ・平成12年度の研修会について報告
- ・会報37号の原稿の状況について報告
- ・平成11年度研究助成について報告
- ・役員改選の推薦委員選任の審議
- ・第一回理事・評議員会の次第と担当者の審議

1202回常務理事会 (H12, 5/20 土)

- ・第38回茨城大会の反省
- ・第1回理事・評議員会の次第等についての確認
- ・中央審査会関係の報告
- ・会計監査報告

・17年度全国学校体育研究大会開催地の報告

・月刊誌『学校体育』についての審議

・H11年度収支決算及びH12年度予算について審議

・H11年度事業報告H12年度事業計画について審議

・実技研修会 (中・高等学校) について審議

1203回常務理事会 (H12, 6/5 月)

- ・平成12・13年度事業内容の変化と対応及び役員の分掌について審議
- ・月刊誌『学校体育』の機関誌への移行について審議
- ・3特別委員会の内容と今後について審議
- ・理事会の持ち方について審議
- ・中央審査会の日程確認
- ・会報37号発行部数確認

1204回常務理事会 (H12, 6/17 土)

- ・平成12年度事業内容と担当者の確認
- ・青森大会について文部省へ挨拶の報告
- ・支部組織活動の調査について報告
- ・50周年記念行事について報告
- ・月刊誌『学校体育』についての報告・審議

1205回常務理事会 (H12, 7/17 月)

- ・文部省へ書類提出について報告
- ・中央審査会の結果報告
- ・実技研修会 (中・高等学校) の報告
- ・機関誌『学校体育』特別委 (編集委) 報告
- ・機関誌『学校体育』販売促進手順等審議

1206回常務理事会 (H12, 9/9 土)

- ・実技研修会 (幼稚園及び小学校の部) 報告

・研修資料集準備状況の報告

・全国大会関係の報告

・機関誌関係の報告

・全国大会本部役員の分担等について審議

・第2回理事・評議員会の次第と担当者審議

・会報38号について確認

1207回常務理事会 (H12, 10/13 金)

- ・研究助成対象府県について報告
- ・文部省関係書類の提出の報告
- ・全国大会本部役員の行動と分担の審議
- ・第2回理事・評議員会の担当者と件名の確認
- ・『学校体育』特別委の動向報告と提案の審議

1208回常務理事会 (H12, 11/20 月)

- ・全国大会について青森大会の反省と事後処理
- ・全国大会の今後について文部省との協議報告
- ・研究助成についての報告と今後の対応審議
- ・50周年記念誌執筆依頼の報告

1209回常務理事会 (H12, 12/21 木)

- ・次年度の全国大会について経過報告と確認
- ・新スポーツテスト実施について審議
- ・『学校体育』特別委の動向報告と提案の審議

1210回常務理事会 (H13, 1/25 木)

- ・全国大会について文部省との協議報告・確認
- ・『学校体育』特別委の報告と提案の審議
- ・会報第38号目次の審議
- ・50周年記念誌特別委の提案 (次回審議)

1211回常務理事会 (H13, 2/26 月)

- ・13年度実技研修会の計画策定について
- ・13年度第1回理事・評議員会の日程予定報告
- ・学校体育振興会の立ち上げについて報告
- ・50周年記念誌特別委の提案と審議

- ・『学校体育』特別委本部ニュースの扱い審議
- ・インタープレスからの要望について審議

1212回常務理事会 (H13, 3/29 木)

- ・全国大会について文部科学省との協議経過報告
- ・50周年記念誌の報告と作業促進依頼
- ・『学校体育』本部ニュースの扱い変更の報告
- ・13年度第1回理事・評議員会の議題担当者確認

2. 平成13年度 研修会・全国大会日程

理事長 椎 木 秀 藏

1. 第32回 全国学校体育実技研修会

(1) 幼稚園・保育園の部

① 日 時 平成13年7月26日 (木) ~ 27日 (金) 9:30~

② 会 場 日本女子大学付属豊明小学校体育館
〒112-8681 東京都文京区目白台1-16-7

③ テーマ 「幼児の心とからだを育てるための実技と理論」

④ 内容と講師

その1 講義「幼児の運動と心とからだの育ち」

その2 理論と実技「大型遊具を使った遊び」

その3 理論と実技「幼稚園・保育園の運動会を考える」

その4 理論と実技「幼児と表現活動」

その5 理論と実技「鬼遊びを考える」

その6 「幼児と自然体験 (山登り、キャンプ)」

⑤ 日 程

	9:30	10:00	12:30	13:30	16:30
7月26日 (木)	受付	開講式	その1 講義	その2 大型遊具の遊び	昼食 休憩
7月27日 (金)	受付	その4 鬼遊びを考える	昼食	その5 表現活動	その6 自然体験
					閉講式

⑥ 定 員 70名 ⑦ 会 費 3,000円 (学生2,000円) (資料代、講師謝礼、運営雑費)

(2) 小学校の部

① 日 時 平成13年7月30日 (月) ~ 7月31日 (火)

② 会 場 東京都渋谷区立加計塚小学校 (体育館、校庭、水泳場・他) ・交通 J R・恵比寿駅
徒歩8分 電 話 3441-5571

③ 研修内容 (体 育 実 技) 及び講師

① 体ほぐしの運動、模倣の運動、表現運動、リズムダンス…筑波大学教授

② 器械運動 (跳び箱、マット、鉄棒) ……筑波大学教授

③ 陸上運動 (走り幅跳び、走り高跳び) ……東京学芸大学教授

④ 水 泳 (クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、スタート) ……筑波大学教授

④ 日 程 (雨天実施)

8:30		9:00		9:30		12:00		13:30		16:00		17:30	
7月30日 (月)	受付	開 講 式	陸上運動		昼食 休憩		・模倣の運動 ・表現運動 ・体ほぐしの運動		ボーリング (懇親会) 自由参加・無料				
7月31日 (火)	受付	器械運動			昼食 休憩		水 泳		閉 講 式				

⑤ 定 員 100名 ⑦ 会 費 4,000円

2 申し込み方法

- (1) 幼稚園・保育園 ・申し込み先 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園 3-1 国立オリンピック記念青少年総合センター内 財団法人 日本学校体育研究連合会 会長 浅田 隆夫

・参加費振込み方法 ＊別添郵便振込用紙を使用して申し込む

＊振込み用紙がない場合は、郵便局で振替用紙をもらって振込む。口座番号001302-563814

(2) 小学校

・参加費振込み方法 ①申込み→郵便またはFAXによる(氏名、所属校名、所属校電話番号を明記)

②参加費→下記口座に振り込む(振込用紙は、各郵便局に備え付けのものをご使用ください。)

渋谷郵便局 (普通) 口座番号 口座名義 米山節男

※宛て先→東京都渋谷区常磐松小学校 校長 米山 節男 ・所在地: ☎150-0011 東京都渋谷区
-7-10 ・FAX: 03-3407-1955 (Tel: 03-3407-3225)

第40回全国学校体育研究大会

- ①研究主題 「仲間と一緒に夢になって取り組む運動遊び・体育学習のあり方」 ②期 日 平成13年11月8日(木)・9日(金) ③全体会場 第1日 シーガイア・サミットホール ④分科会場 第2日 幼1、小3、中4、高2、養2の12会場 ⑤第2回理事・評議員会及び代表者会議 日 時 平成13年11月7日(水) 14:00~17:00 会場シーガイア

3. 平成13年度 事務局からのお願い

事務局 山 本 久 子

- ① 県によっては事務局の変る所もあるかと思われ
ますが、該当県は速やかにその旨ご連絡下さい。
- ② 年度初めの書類は前年度事務局並びに県教育委員
会宛に送付されると思いますのでご配慮願ひ
いたします。
- ③ 「納入方法について」
下記の方法でお願いいたします。
- (イ) 分 担 金
(ロ) 全国学校体育研究大会資料集の申し込み
(13年度宮崎県)
- (ハ) 全国学校体育研修会申し込み
(幼稚園、保育園の部、小学校の部)
- (ニ) 一般賛助会費、終身賛助会員(個人の部)
以上イ)~ニ)に関してはすべて郵便振込とします。
- 郵便振込 口座番号東京 00130-2-563814
学体連事務局
- いずれも書類発送時に振込用紙を同封致します。
- ④ 特別賛助会員団体会費納入方法について
振込宛先 東京三菱銀行 新宿西口支店
普通預金 口 座 6418028
(財) 日本学校体育研究連合会
会 長 浅 田 隆 夫
- ⑤ その他、連絡事項
(1) 事務局開局日時について
週3回(13時~17時)出勤しておりますが曜
日については若干、不定期となることがありま
す。連絡が取れない場合は、出きるだけFAXを
ご利用いただければと思います。
- (2) 事務局本部 国立オリンピック記念青少年総
合センター内センター棟3階です。

FAX 03-3465-7464 TEL 03-3465-3954

平成12年度 賛助会員一覧表

終身賛助会員（3万円）		愛 知	塩 谷 伸 晴	一般賛助会費（1万円）		新 潟	毛 原 亮 照	島 根	石 倉 國 男
福 島	大 川 幸 子	〃	西 濱 士 朗	北海道	小 池 正 雄	石 川	諏 訪 俊 春	徳 島	中 西 知
茨 城	月 岡 透	大 阪	粥 川 昌	福 島	三 島 好 二	愛 知	高 崎 伍 兆	愛 媛	阿 部 由美子
東 京	上 坂 守 男	〃	佐 藤 善 昭	栃 木	栗 田 和 行	大 阪	家 次 政	熊 本	熊 谷 正 純
福 井	三 輪 邦 司			千 葉	石 井 達 郎	兵 庫	河 野 修 一 郎		

Gakutairen

平成13年度役員一覧表

H.13.6.20現在
(財)日本学校体育研究連合会

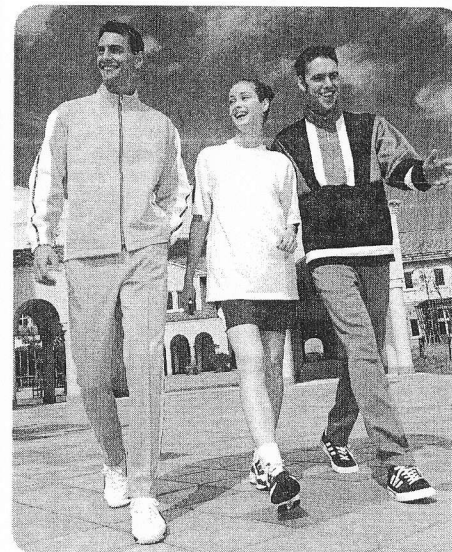
担当職務	氏 名	現 職・職 名	電 話	担当職務	氏 名	現 職・職 名	電 話
名誉会長	大石 三四郎	筑波大学名誉教授	自0480-65-7813	同	峰須賀 博昭	港区立高陵中学校校長	自0427-45-3473
会 長	浅田 隆夫	筑波大学名誉教授	自03-3312-1891	同	近藤 充夫	東京学芸大学名誉教授	自03-3637-1404
副 会 長	金森 久	元我孫子二階堂高等学校校長	自048-861-6855	監 事	松田 智男	元都立八王子北高等学校校長	自042-572-6839
同	深川 長郎	国士館大学文学部教授	自03-3321-2726	同	片岡 晁夫	国士館大学体育学部教授	0298-53-6340
理 事 長	椎木 秀蔵	元豊島区立千早中学校校長	自042-393-6863	同	大畑 重喜	元筑波大学付属ろう学校副校長	自0471-74-7150
副理事長	三原 忠彦	元府中市立教育委員会体育課長	自0426-65-3165	幹 事	古川 浩洋	都立工業高等専門学校助教授	自03-3885-4156
同	友添 秀則	早稲田大学人間科学部教授	自042-996-0570	事 務 局	三浦 美知子	竹早教員保育士養成所	自03-5749-7170
常務理事	森 知高	福島大学教育学部教授	自0245-48-8218	同	山本 久子	学体連事務局主任	自03-3651-7477
常務理事	後藤 一彦	荒川区立ひぐらし小学校校長	自0489-22-2084	同	佐藤 加子	同 副主任	自047-343-5913

No.	県 名	理事氏名	現 職・職 名	電 話	評議員氏名	現 職・職 名	電 話
1	北海道	宮崎 岩次	札幌市立真駒内小学校校長	011-581-1608	菅原 正利	北海道石狩南高等学校校長	013-373-4181
					西村 正	札幌市立新川中央小学校校長	011-761-1511
2	青 森	渋谷 昭信	青森県立平内高等学校校長	017-755-2333	吉田 邦男	青森県立北中学校校長	017-755-2333
3	岩 手				細川 佳紀	岩手大学教育学部付属小学校教諭	019-623-7275
4	宮 城				高木 力雄	宮城教育大学教授	022-214-3461
5	秋 田				嵯峨 正俊	秋田市立広面小学校校長	018-833-0736
6	山 形				小原 正隆	山形県立山形中央高等学校	023-641-7311
7	福 島				鈴木 興一	福島市立茂庭中学校校長	024-596-1026
8	茨 木	小暮 守雄	茨城県立笠間高等学校校長	0296-72-1171	小松崎 利夫	水戸市立石川中学校校長	029-254-1700
9	栃 木				神原 彰夫	栃木県立宇都宮中央女子高等学校校長	028-622-1766
10	群 馬				永島 武	群馬県立館林高等学校校長	0276-72-4307
11	埼 玉				倉橋 政道	埼玉県立浦和高等学校校長	048-886-3000
12	千 葉	上野 正裕	千葉県立沼南高等学校校長	0471-91-8121	浅野 興治	千葉県市立中中学校校長	043-265-1818
13	東 京	梅村 和伸	東京都立井草高等学校校長	03-3920-0319	平島 満	都立小松川高等学校校長	03-3685-1010
					佐山 義昭	板橋区立志村第二中学校校長	03-3969-3363
					米山 節男	渋谷区立常盤松小学校校長	03-3407-1576
14	神奈川	桜井 貞久	横浜市立二谷小学校校長	045-491-8948	日野 宏	横浜市立東永谷中学校校長	045-823-9901
					下川 秀俊	神奈川県立小田原城内高等学校教諭	0465-23-3251
15	山 梨	田中 資時	県立甲府昭和高等学校校長	055-275-6177	古屋 博正	田富町立田富中学校校長	055-230-7080
16	長 野				江澤 啓二	上田市立西小学校校長	0268-22-0419
17	新 潟				井田 政芳	安塚町立安塚中学校校長	02559-2-2022
18	富 山				林 和郎	婦中町立宮野小学校校長	076-466-2306
19	石 川	水野 郁夫	金沢市立夕日寺小学校校長	076-252-4471	久田 進	小松市立中海小学校校長	0761-47-1020
20	福 井				藤田 成一	福井県立若狭高等学校校長	0770-52-0007
21	岐 阜				石樽 昭之	岐阜県立大垣東高等学校校長	0584-81-2331
22	静 岡				望月 啓次	静岡県立三島北高等学校校長	0559-86-0107
23	愛 知	多湖 実松	愛知県立刈谷高等学校校長	0566-21-3171	奥村 匡彦	名古屋市立吹上小学校校長	052-732-0181
24	三 重				磯田 富弘	三重県立鳥羽高等学校校長	0599-25-2935
25	滋 賀	保木 親雄	新旭町立湖西中学校校長	0740-25-2271	鈴木 英明	滋賀県立信楽高等学校校長	0748-82-2124
26	京 都				東山 力	京都市立向島藤の木小学校校長	075-623-0046
27	く 販	石黒 典男	大阪府立白菊高等学校校長	0722-21-0077	福井 保之	松原市立天美北小学校校長	0723-35-7400
					村上 信	大阪市立瓜破中学校校長	06-6709-2221
28	兵 庫	石嶺 正一	兵庫県立芦屋高等学校校長	0797-32-2325	飯田 賢良	兵庫県教育委員会事務局体育保健課主幹	078-362-3787
					濱田 浩嗣	兵庫県教育委員会事務局体育保健課係長	078-362-3787
29	奈 良	井澤 一幸	吉野町立吉野小学校校長	07463-2-4333	堀田 一郎	桜井市立桜井中学校校長	0744-43-7345
30	和歌山				装岡 勇人	和歌山市立草小中学校校長	073-444-1030
31	鳥 取				竹本 愛忠	鳥取市立湖山小学校校長	0857-28-1020
32	島 根				内田 俊夫	松江市立川津小学校校長	0852-21-2507
33	岡 山				成広 淳太郎	岡山県立岡山一宮高等学校校長	086-284-2241
34	広 島	中山 龍興	広島市立袋町小学校校長	082-247-9241	河野 一則	広島市立可部小学校教諭	082-814-2428
35	山 口				阿野 尚之	山口県立防府養護学校	0835-22-6108
36	徳 島	井澤 秀輝	那賀川中学校校長	0884-42-0058	横田 勝	徳島中学校教諭	088-653-8338
37	香 川				五ノ坪 和彦	香川県立香川中央高等学校校長	087-886-7151
38	愛 媛				水野 敬正	愛媛県立松山北高等学校校長	089-926-3936
39	高 媛				竹田 延	高知県立高知丸の内高等学校校長	088-873-4291
40	福 岡	小室 宏孝	福岡県立玄界高等学校校長	092-944-2735	原 図南夫	福岡市立春住小学校校長	092-431-2315
					図師 靖範	福岡市立青葉中学校校長	092-691-9386
41	佐 賀				田口 良之	嵯峨市立兵庫小学校校長	0952-23-5791
42	長 崎				井手 大統	長崎市立小島中学校校長	095-821-9125
43	熊 本				永田 敬	熊本市立砂取小学校校長	096-382-7033
44	大 分				広岡 睦彬	大分市立判田中学校校長	097-597-0022
45	宮 崎	竹村 義政	宮崎県立盲学校校長	0985-39-1021	田中 久光	宮崎市立徳中学校校長	0985-23-2225
46	鹿児島				東 憲治	鹿児島県立甲南高等学校校長	099-254-0175
47	沖 縄	阿波連 恵子	沖縄県立本部高等学校校長	0980-47-2418	庭安 純一	沖縄県立小禄高等学校教諭	098-857-0481

機関誌学校体育の「編集・広報委員」

2001年3月現在

県名	氏名	連絡先	電話番号	ファックス
北海道	未定			
青森	未定			
岩手	未定			
宮城	真壁 淳一	〒981-3217 仙台市泉区実沢字一本橋20 仙台市立実沢小学校	022-379-2418	022-379-2882
秋田	藤原 茂	〒011-0913 秋田市飯島鼠田2丁目2-1 秋田市立飯島小学校	018-845-0377	018-847-1643
山形	角崎 朋博	〒990-0034 山形市東原町4丁目6-16 山形南高等学校	023-622-3350	023-622-3350
福島	福士 寛樹	〒960-8003 福島市森合字中谷地2-3 福島市立森合小学校	024-557-0155	024-558-4982
茨城	佐藤 英光	〒310-0035 水戸市立第一中学校	029-224-2424	029-224-2425
栃木	飯田 道彦	〒320-0057 宇都宮市中戸祭1-6-3 栃木県高等学校体育連盟	028-622-8660	028-622-7579
群馬	高田 勉	〒371-8570 前橋市大手町1-1-1 群馬県教育委員会保健体育課	027-226-4634	027-224-8780
埼玉	未定			
千葉	苅込 英昭	〒276-0025 八千代市勝田台南1-1-1 八千代高等学校	047-483-4949	047-483-4949
東京都	斎藤 滋樹	〒156-0045 世田谷区桜上水4-5-2 世田谷区立松沢中学校	03-3303-7381	03-3303-7151
神奈川県	大塚 靖夫	〒229-0014 相模原市若松2丁目22-1 相模原市立若松小学校	0427-48-5813	
山梨	仙洞田茂雄	〒400-0049 甲府市富竹4丁目5-8 甲府市立富竹中学校	055-228-0251	055-228-0251
長野	江澤 啓二	〒386-0027 上田市常磐城5-1-53 上田市立西小学校	0268-22-0419	0268-22-3192
新潟	未定			
富山	未定			
石川	中江 浩史	〒921-8013 金沢市新神田1-10-58 金沢市立新神田小学校	076-291-3821	
福井	正玄 嘉子	〒910-8580 福井市大手3丁目17-1 福井県教育庁スポーツ課	0776-20-0573	0776-20-0670
岐阜	北川 裕子	〒502-0931 岐阜市則武清水1841-11 県立岐阜北高等学校	058-231-6628	058-213-7815
静岡	杉山 哲傑	〒420-8601 静岡県教育委員会体育保健課	054-221-3171	054-273-6456
愛知	天野 博昭	〒460-8534 名古屋市中区三の丸3-1-2 愛知県教育委員会	052-961-2111	052-961-0639
三重	木村 元彦	〒514-0062 津市観音寺町471 三重大学附属中学校	059-226-5281	059-226-5282
滋賀	野村 智洋	〒520-0817 大津市昭和町10-3 滋賀大学附属小学校	077-527-5251	077-527-5259
京都府	未定			
大阪府	青木 和男	〒563-0023 池田市井口堂3-3-30 池田市立石橋小学校	0727-61-8500	0727-61-8642
兵庫	金森 明彦	〒665-0025 宝塚市ゆずり葉台1-1-1 宝塚西高等学校	0797-73-4035	0797-73-6298
奈良	古川 典央	〒633-0091 桜井市桜井95 桜井高等学校	0744-45-2041	0744-42-3694
和歌山	平 逸男	〒640-8585 和歌山市小松原通1-1 県教育庁スポーツ健康課	073-441-3693	073-43-1408
鳥取	西尾 幹雄	〒680-0945 鳥取市湖山町南4丁目101 鳥取大学附属小学校	0857-35-5171	0857-31-5172
島根	安藤 賢一	〒690-8502 松江市殿町一番地 鳥取県教育庁保健体育課	0852-22-5426	0852-25-9508
岡山	徳永 充生	〒703-8276 岡山市門田屋敷本町1-17 岡山市立旭東小学校	086-272-5168	086-272-5169
広島	河野 一則	〒731-0221 広島市安佐北区可部4-9-1 広島市立可部小学校	082-814-2428	082-815-9228
山口	實川 昌弘	〒753-8501 山口市滝町1-1 山口県教育庁保健体育課	083-933-4679	083-922-8737
徳島	横田 勝	〒770-0807 徳島市中前川町3丁目16 徳島中学校	088-623-1371	088-623-1475
香川	窪田 啓伸	〒760-0017 高松市番町5-1-55 香川大学附属高松小学校	087-861-7108	087-861-7106
高知	宮川 雅一	〒780-0850 高知市丸ノ内1-7-52 高知県教育委員会体育保健課	088-821-4751	088-821-4725
愛媛	藤井 敬三	〒791-8016 松山市久万ノ台甲1485-1 愛媛県立杉山西高校	089-922-8931	089-923-3703
福岡	廣渡喜代治	〒811-3114 福岡県古賀市舞の里3-6-1玄界高等学校	092-944-2735	092-944-4565
佐賀	山田 良典	〒840-8570 佐賀市城内1丁目1番59号 佐賀県体育保健課	0952-25-7234	0952-25-7322
長崎	三谷 智	〒850-0834 長崎市上小島4丁目18番1号長崎市立小島中学校	095-821-9125	095-826-8149
熊本	池田今朝清	〒862-8017 熊本市上南郡町1433 熊本市立東部中学校	096-380-7959	096-380-5712
大分	久野 慎吾	〒870-0126 大分市横尾2843-4 大分市立大東中学校4	097-520-2702	097-520-3531
宮崎	築地原 静	〒880-0942 宮崎市生目台東4-2-1 宮崎市立生目台東小学校	0985-53-5181	0985-53-5182
鹿児島	杉元 伸行	〒891-0133 鹿児島市平川町4047 県立錦江湾高等学校	099-261-2121	099-261-2122
沖縄	未定			



もっと楽しく快適に、
スクールスポーツは
新しい領域へ。

コロバインは、
(財)日本学校体育研究連合会推薦品。
つねによりよい学校体育の
環境づくりを提案しています。

Columbine

コロバインスクールスポーツウェア

(財)日本学校体育研究連合会特別賛助会員
(財)日本学校体育研究連合会推薦品

児島株式会社

本社/岡山県倉敷市児島小川12-4-60 TEL (086) 473-4634
関東営業所/埼玉県大宮市上小町1085 TEL (048) 642-5883
盛岡営業所/岩手県盛岡市流通センター北1丁目4-18 TEL (0196) 38-7501
URL: http://www.netlaputa.ne.jp/~kojima email: kojima@urban.ne.jp

新体力テスト集計・分析システム

(平成12年度実施文部省体育局発表)

SPORTS TEST

みつめたい教育と未来
第一学習社
スポーツテスト研究会

体力づくりをめざして

- 個人カードを全面改訂
- 部活顧問用資料を充実
- 測定実施の完全バックアップ

集計・分析処理
料金(1人分)

220円(税込)

(東京) 〒116-0013 荒川区西日暮里2-50-5 ☎ 03-3891-9802 Fax 03-5604-7374
(大阪) 〒564-0044 吹田市南金田2-19-18 ☎ 06-6380-1391 Fax 06-6368-1018
(広島) 〒733-8521 広島市西区横川新町7-14 ☎ 082-234-6800 Fax 082-503-3084
札幌・仙台・小山・横浜・名古屋・福岡・新潟・金沢

情報化時代におくる

メッセージ

平成12年9月、弊社は全社でISO9002認証取得
品質最優先の製品で顧客に満足と信頼を提供する

●御注文専門の印刷デパート



東京 墨田 **合同印刷株式會社**

東京都墨田区業平2-9-13 TEL (3624) 6111(代) FAX (3621) 4620

代表取締役社長 長 棟 和 子

成長期の正しい足の発育促進に大きな効果を発揮する
画期的な21世紀のシューズ!

教育シューズ® フレッシュ21

推薦 (財)日本学校体育研究連合会
全国小学校体育研究連盟

特長

外反母趾
防止設計

健康を促進
するトルマリン
加工の中敷

0.5cmきざみ
で足にピッタリ
フィット



教育シューズは日進ゴム(株)
の登録商標です。

(財)日本学校体育研究連合会特別賛助会員

教育シューズ振興会
日進ゴム株式会社

本社・工場/〒700-0034 岡山市高柳東町13-46
TEL (086) 252-2456 FAX (086) 254-8595

学校 体育

平成13年4月号から
(財)日本学校体育研究連合会
機関誌として
新たなスタートです。

B5判・48頁

定価 420円

年間 5040円



増刊号

創刊50周年記念号

■楽しい運動例と指導ことば集

陸上運動・競技編 定価 1,630円(税込み)

定価 2,200円(税込み)

ボール運動・球技編 定価 1,750円(税込み)

■改訂「学習指導要領」の

■体育授業のジャンケンゲーム集

定価 1,950円(税込み)

基本的な考え方と内容の解説

定価 1,600円(税込み)

(株)日本体育社

〒113-0033

TEL 03-3811-6911 FAX 03-3811-6290

東京都文京区本郷2-40-13 E-mail XLB07212@nifty.ne.jp

財団法人 日本学校体育研究連合会 特別賛助会員

骨年齢が5歳若返る 粉末コラーゲン

NHK「ためしてガッテン」で放映されました「コラーゲンの真実」は大変話題を
呼びましたが、その番組の中で行なわれた実験では、粉末のコラーゲンはビタミン
Cと一緒にとることで、骨密度のアップや肌の弾力に非常に効果的なのが立証
されました。

治療院・整体院のプロの先生方に大評判!!

ヒアルロン酸配合
ミリオンの
コラーゲン

- ・粉末タイプのコラーゲンです。
- ・ビタミンCが含まれています。
- ・ヒアルロン酸がコラーゲンをつ
なぎ保湿効果を高めます。
- ・ビタミンEがヒアルロン酸の体
内再生をたすけます。
- ・携帯に便利な分包タイプです。 2.5g×60袋入 3,800円(税別)



長寿・健康生活の輪を広げる
株式会社ミليون株式会社
〒331-0852 大宮市桜木町1-12-5
URL http://www.millionpower.co.jp

TEL 048-641-2291
FAX 048-641-2291



(財)日本学校体育研究連合会特別賛助会員

株式会社インタープレス

本社 / 〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-5京橋富士ビル
TEL 03-3566-6000 FAX 03-3566-6010
大阪営業所 / 〒531-0041 大阪市北区天神橋7-1-10阪急ビル
TEL 06-6881-1601 FAX 06-6881-1622

インタープレスの学校向け保健教材ラインナップ

掲示新聞 児童、生徒の心と体の健康をテーマに発行する掲示新聞。
総合的学習の資料としても役立て下さい。

- ◎ 保健教材ニュース
- ◎ 学校保健ニュース 中学版 (毎月3回、5・15・25日発行)
- ◎ 学校保健ニュース 高校版 価格/14,364円(税・郵送料込み)

書籍

一現実社会の視点で問い質す一実践・教師の学校
学校教育見直しの視点、崩壊する子どもの心との向き合い
方等を教育者の方々の実践や体験談とともに解説。

著者/川村 史記 (情報教育ジャーナリスト)
監修/福島 康 (芸術教育研究所客員研究員)
上里 龍夫 (学校法人上里学園理事長)
定価/2,600円(税込み)

応急パネル・手洗いシート

〈応急手当パネル〉
いざという時の応急処置を内科編と外科編として、子どもにもわかりやすい
イラストで解説した保存版。B2サイズ 2,000円(1枚) 3,500円(2枚組)
〈手洗いシート〉
健康を守るために大切な「手洗いの仕方」を写真で説明しています。
B4サイズ 裏面シール加工 500円(1枚) 5,000円(12枚セット)

ESPA

EDUCATION SHOES PROMOTIVE ASSOCIATION

人にやさしく、足にやさしい
運動機能を高める
科学された
21世紀のシューズ!

推薦

(財)日本学校体育研究連合会



学進102型

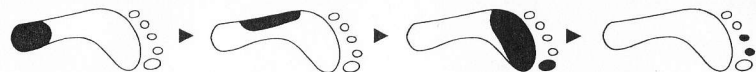


教育シューズ
フレックス21



GS-1000

より良いシューズで正しい運動・歩行を



歩行時の足裏の体重の移動

財団法人 日本学校体育研究連合会特別賛助会員

教育シューズ振興会

会長 渡 邊 昌 平

理事長 宮 本 靖 彦

本部事務局 〒700-0034 岡山市高柳東町13番46号 日進ゴム(株)内

TEL (086) 252-4381

FAX (086) 254-8595